

Dannoue Itahigroup in Minamisanriku Town : poems preaching Buddhism in the Muromachi Period

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 則和 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24025

南三陸町壇の上板碑群

——室町期の「方法一如」偈板碑——

田 中 則 和

1 はじめに

筆者は、南三陸町域の板碑（約280基）及び城館跡（33城）について宮城県考古学会研究発表会（2016年5月）特集：「復興関係調査で拓かれた地域の歴史 2 南三陸地域の中世社会—新井田館跡を中心に—」を経て中間報告的にまとめた¹。町内の板碑は、弘安六年（1283）以後戸倉・志津川地区に多く造立されたが、室町期には入谷地区沢内板碑群など小型板碑からなる大規模な板碑群が形成されるが、歌津地区では『歌津町史』（1986）²に弘川の「壇の上」と「千本桂」の2基が紹介されているのみであった。

しかし、2016年末に旧南三陸町観光協会データベースHPを参照したところ、「弘川集落西

の丘陵端を「壇の上」と称し、伊里前に移転する以前の西光寺に關係する地名と思われませんが、その壇の上にたくさんの中世板碑が重なり合って埋もれています。旧歌津町史は弘川壇の上に残る中世板碑1基を紹介していますが、その足元から半ば土中に埋もれた形で有銘無銘の多くの板碑が発見されました。その数40~50基。一地区からこれだけのまとまった数の板碑が発見されるのは珍しく、町内では入谷大船沢の沢内板碑群に次ぐ規模です（ただし沢内では無銘のものはカウントされていません）。」「年代を特定できていませんが、他の板碑群の例から考えて室町時代の15世紀前後のものと考えられる。弘川集落は田東山信仰の拠点集落であり、一方で大規模な土金掘り集落でもあった可能性が高く、この板碑群もそれらとの関わりで



第1図 弘川・壇の上板碑群の位置

(15世紀に想定される寺院等図示・国土地理院：<https://maps.gsi.go.jp/#12/38.732259/141.449146/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0l0u0t0z0r0f>)を下図として作成)



第2図 弘川周辺の遺跡（「宮城県遺跡地図」を下図として作成）



第3図 道標（「坂貝」）



第4図 道標（「千本柱」）

理解していく必要があります。」という注目すべき説明が記載されていた。そこで町の元文化財担当の鈴木卓也氏から諸情報のご教示をいただき、2016年12月より弘川の山内重義区長のお世話で壇の上板碑群（宮城県本吉郡南三陸町歌津弘川）の現況調査に入ることができたし

だいである³。

2 弘川の歴史的環境（第1.2図⁴）

壇の上板碑群のある弘川は北上高地の南部にあり、霊山田束山（512m）の西登拜口であり、



第5図 南三陸町周辺の15世紀の板碑と中世後期の主要城館跡分布

(国土地理院 (<https://maps.gsi.go.jp/#12/38.732259/141.449146/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0l0u0t0z0r0f>) を下図として作成)

「弘川」の地名も、登拝前に川で禊をしたことに由来する⁵。西の神行堂山(461m)、南東の貞任山(360m)にはまれた谷合いの小集落である。弘川から坂の貝峠への道筋の志津川への山道の分岐点にある天明七年(1787)の道標には「是從 右ハ入や 川下りいさと前 左ハ志つ河 はらい川」⁶とあり、千本桂脇の年号不明の道標には「是從川下いさとまへ 右ハマごめ 左ハいりや」⁷とあるように、東方の歌津の中心地である伊里前(約7km)、志津川及び北方の本吉町馬籠、西方の入谷を通じて登米郡に至る分岐点の要衝である。現在、伊里前にある西光寺(曹洞宗)は、永享元年(1429)、水沢の正法寺四世中山良用和尚により弘川に開創されたという⁸。この年、登米市米川の大慈寺も中山良用和尚により天台宗から改宗して再興しており⁹、正法寺の教線拡大にあたり、重要な場所とみなされる要衝の集住地区であったと考えられる。また、西登拝口の千本桂は、樹齢

550年¹⁰とのことで、15世紀半ばに植えられたことになる。ここから田東山山頂を目指し約1.6km登った尾根の西端に町史跡の満海壇がある。「南三陸町バーチャルミュージアム」HP(南三陸町)によると、「満海上人は天正年間(1573~1592)気仙沼松崎に生まれ、弥勒菩薩に深く帰依し、自ら即身仏となるため入定したのだと伝えられています。また一説には、田東山がキリシタンの焼き討ちにあって荒廢の危機にあったときに、切支丹退散を念じて入定したのだとも伝えられています。」とあり、説明板には、その出典を清水浜一明院誌「田東山中興烈祖満海上人伝」とある。ここから尾根伝いに約1.4kmの田東山山頂付近では宮城県指定史跡田東山経塚群及び清水寺跡及び寂光寺跡、さらに東方約1kmの金峯寺跡が登録されている。田東山経塚群は1971年、歌津町・本吉町教育委員会による5号経塚の発掘調査により12世紀後半の法華経を収めた青銅製の経筒(底部は松鶴

紋鏡)が出土しており、報告書は未刊であるが藤沼邦彦氏の「宮城県の経塚について」において、出土した経容器の三筋壺とともに奥州藤原氏の「平泉仏教文化圏」に属すると位置付けられている。1988年から1991年には計仙麻大嶋神社境内とその南方付近が宮城県教育委員会により発掘調査され、掘立柱建物跡などの遺構は14～16世紀の「山岳宗教遺構(宿坊跡?)」と推定された。

1996年度から1997年度には、歌津町教育委員会の依頼を受けた大谷大学女子大学(代表 中村浩)により計仙麻大嶋神社社殿裏付近の発掘調査が実施され、当地を清水寺跡と推定し、山頂部の12世紀の経塚群、下方の山腹の寺院群(14世紀頃には成立)および行場群の複合体が田束山遺跡群と捉えている¹¹。弘川から東方約2.8km、田束山に登る人たちが松明に火を付けたことに由来するという「樋の口」という集落¹²があり、その奥に樋の口出雲館跡がある。丘陵頂部ではなく、平坦地に立地し、規模は東西50m、南北20mと小規模なことから、紫桃正隆氏は現集落の祖にあたる中世の山内出雲の屋敷跡と推定している¹³。また、その付近には応永十六年(1409)創建とされる天台宗津龍院があったとされるのは注目される。津龍院は永禄六年(1563)、曹洞宗に改宗し、歌津城(稲渚館)跡に近い館浜におりたことは本稿の時代背景と

して重要である¹⁴。

3 弘川「千本桂」、田束山の板碑

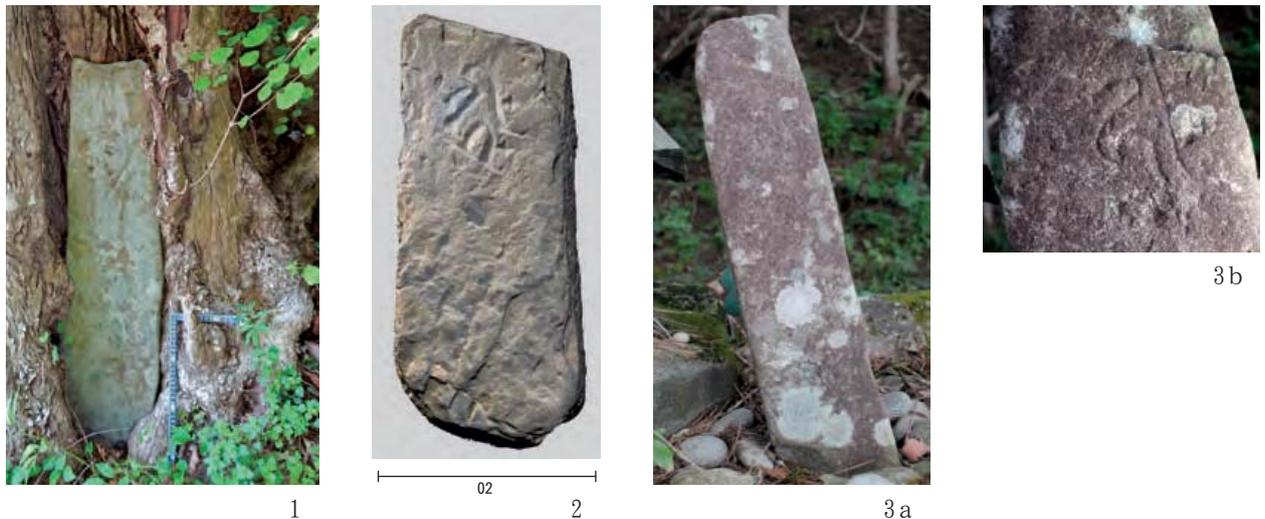
(1) 「千本桂」の板碑

田束山西登拝口の「千本桂」¹⁵(南三陸町指定天然記念物)に抱かれている板碑である。地上高95cm、幅23cm、厚さ11cm(最大部位でなく計測可能部)。石材は緑灰色の砂岩である。地上高は壇の上板碑群の最長91cmを越える。頭部は平坦に整形されている。種子はカ(地藏菩薩)で浅い薬研彫りである。壇の上板碑群のカのような異体ではない。碑面は剥落が進んでいる。銘文は確認されなかった。

(2) 計仙麻大嶋神社付近の板碑

① 宮城県教育委員会「寂光寺跡」発掘調査 D区出土板碑(東北歴史博物館蔵)

報告書¹⁶によれば、D区平坦面1層出土で「本来の造立位置を離れ土留めに転用されていたもの」とされる。長さ38cm、幅16cm、厚さ5cmでほぼ完形である。石材は青灰色の粘板岩である。種子はキリクである。頭部は鈍角の偏三角形で平坦である。銘文は認められない。表土からの出土ではあるが、田束山からの出土板碑として貴重であり、壇の上板碑群の板碑の黒色泥岩とした板碑類の形態、法量に近似してい



第6図 周辺の板碑

(左から 1「千本桂」 2「寂光寺跡」出土板碑(SFM) 3a 計仙麻大嶋神社石宮 b 種子部)

る。表土出土とはいえ、小型板碑の群集する傾向と周囲の宗教的環境から、付近に板碑群の存在が推測される。

② 計仙麻大嶋神社石宮の板碑

1996年に大谷女子大学により調査された田東山山腹にある計仙麻大嶋神社石宮の板碑である¹⁷。同報告によれば石宮は寛政年中（1789—1801）に馬籠村から奉納された由である。地上高65.5cm、幅15.2cm、幅10.0cmである。石材は砂岩である。碑面は風雨により摩滅している。種子は不鮮明であるがキリクとみておきたい。線彫りに近く字形も崩れている。銘文は確認されない。なお、大谷女子大学の調査では計仙麻大嶋神社地は江戸時代に清水寺と呼称された寺院地に相当するとした。

4 壇の上板碑群の立地

入谷から坂の貝峠を越えて谷あい而降りてまもなく、伊里前川上流の山々に囲まれた弘川の小集落に達するが、その道の北側の丘陵は、道に沿うように尾根が東方に伸びて、先端が張り出しており、その突出部が「壇の上」、その下の平地は「壇の下」と呼ばれている。突端の標高は約178m、その下の標高は約170mであり、約8mの比高がある。三崎一夫氏の『弘川民俗小記』¹⁸の中に「古い墓地の近くに塚があって供養碑が建てられている。この塚に柿と水を持って入定したという言い伝えがある。」という塚と供養碑は壇の上板碑群に相当すると思われる。ただし、「入定」の段落は田東山の満

海壇の伝承と混同したものではないだろうか。また、『歌津町史』では「壇の上」「壇の下」地名は寺院修法の跡とし、「安養山西光寺が弘川に在った永享（1429）から天正末期（1591）」に関連付けている¹⁹。なお、この突出部の東側裾部はゆるやかな傾斜になっており、二段の平地があって近世墓地となっているが、土地の人はこの山を「天神の森」²⁰という。天神社があったことに由来するのではないだろうか。その左手には傾斜のある痩せ尾根があり、その南側の急斜面下には入谷からの細道が走っている。戦乱の時期は、あるいは入谷方面からの交通を監視と防御する大土塁的機能を果たしていた可能性もある。

5 調査の方法

まず、現状を正確に表現し、番号をふり観察するためには実測図が必要であるが個人では困難である。さらに分かりやすく表現するためSFM（三次元測量）を検討したが、経費及び操作の力量が欠如している。そこで、九州文化



1



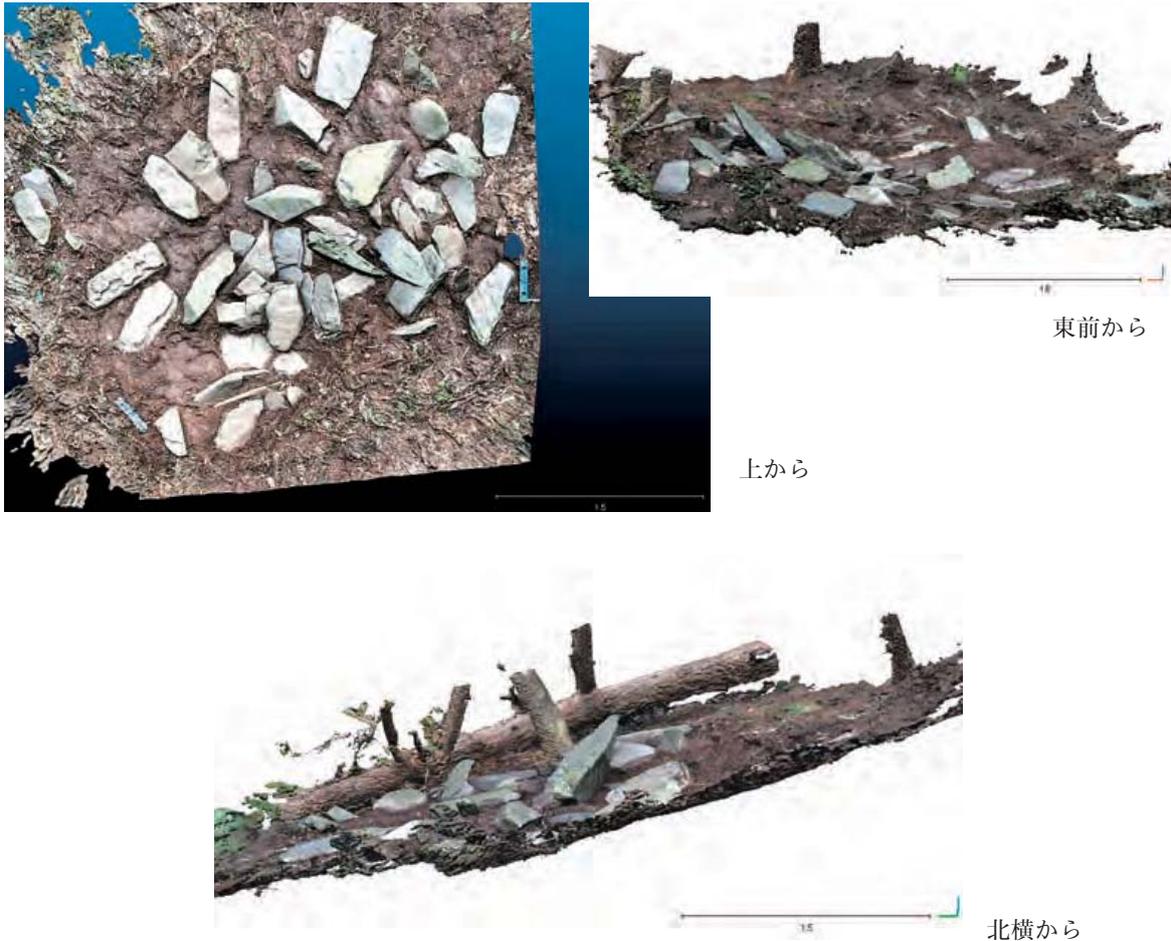
2



3

第7図 景観

1 立地（パノラマ・中央上が板碑群 右は天神の森） 2 板碑群（西から） 3 板碑群（北から）



第8図 オルソフォト（九州文化財計測集団（CMAQ代表 永見秀徳）作成・提供データを加工）

財計測集団（CMAQ代表 永見秀徳氏）に相談し、南三陸の歴史の解明と歴史遺産の保護活用ひいては復興に寄与することに賛意を示していただき、筆者が写した写真約400枚からオルソフォトを作成していただき、これに仮番号をふり、観察カードを作成し現況調査に臨んだ。

その後調査の進行に伴い板碑の分布が拡大したため、全体を再撮影した写真約300枚により、Agisoft PhotoScan と Cloud Compare によりオルソフォトを作成した（第9図）²¹。西南部（山側）に板碑及び板碑状石製品4点、北東斜面にずり落とされたと考えられる板碑状石製品7点の範囲を追加している。

6 板碑及び板碑状石製品

(1) 概要

痩せ尾根を下った岬状の先端にかまぼこ形の

小平場（南北約6.5m、東西約4.5m）があり、小型の板碑及び板碑状の石が平場のほぼ全面、南北約5.5m、東西4mほどの範囲に確認された。中央辺は折り重なっておりその範囲は平面形は長方形に近い南北3m、東西1.5mである。長軸は磁北に近い。その南部は窪んでおり、「主体部」があるとするれば陥没している可能性がある。ただしこの最上部の板碑は浮いたり断裂していることから盗掘されている可能性がある。当初はこのあたりが比較的原位置に近いと考えていたが、西南隅に立っている板碑があり、北西隅には側辺のみ露出した板碑が二基露出している。平場といっても現状は19度前後の傾斜があるので、これらを結んだ線（ほぼ南北に近い）の東側下方に板碑群が保存のよい状態で埋没している可能性がある。この場合は南北約5.5m、東西約4.5mとなる。ここの突端部に立ち、この間から田東山とその登拝ルートがほ

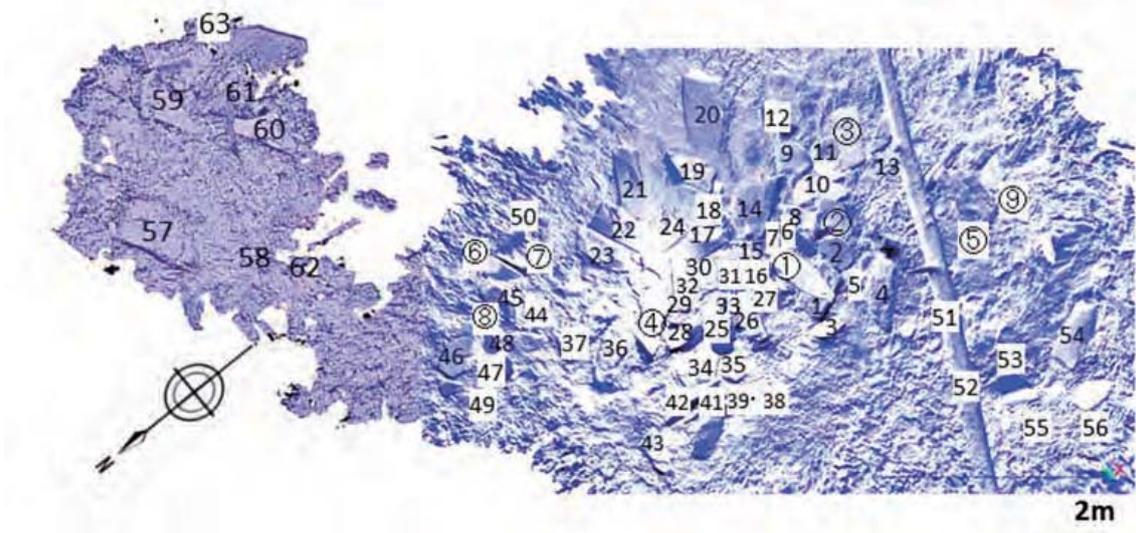
ぼ正面に見える。

ほとんどの板碑は横位であるが2点の板碑は斜めになっていて『歌津町史』で紹介されている1点の板碑 (No.1) が、最上位にあり、これらの中では最も大きく (長さ73cm)、銘文のあるものである。ただし、碑面の色変化から土中よりすでに抜かれていることが判明している。前述の旧観光情報から『歌津町史』の刊行された1986年段階では、この最上位の板碑が目立ち、他は半ば土に埋もれていた可能性がある。すなわち、本来はマウンドがあった可能性もある。

現況調査の結果、板碑及び「板碑状石製品」²² 72点を確認した。種子を確認できた板碑は9点である。その他の63点については板碑の可能性が高いが、地表と密着していない板碑のほかは、ひっくり返すと現状を変更することとなるので表裏確認をせず、「板碑状石製品」として第13図に表化した。今後、裏面を確認することより「板碑」と認定されるものが増加すると考えられる。全体として種子が明瞭ながら、断片になっているものがあり、さらに大ぶりの板碑と推定されるものが急斜面上にずり落ちているなど本板碑群がかなりの損壊を受けていること



壇の上板碑群オルソフォトテクスチャ (北側崖傾斜面付近は不正確である) 方位: 磁北



壇の上板碑群板碑・板碑状石製品位置図・オルソフォトソリッド (北側崖傾斜面付近は不正確である) ※○数字は板碑 方位: 磁北

第9図 壇の上板碑群オルソフォト

を示している。石材については永広昌之氏（東北大学総合学術博物館）のご教示をいただいた。以下、板碑について個別に述べる。

No. 1 は、右側面下部が欠損しているが、完全な形に近く、斜めに地中に刺さっているが地上に出ている部分は末端に近いと思われる。碑面を観察すると右側下部欠損付近より上方は風化し黄緑色を帯びて粗肌なのに対し、それより下方はつややかな青みを帯びているので本来の地上露出レベルが推測される（第11図1）。現在露出している長さは73cm、幅（最大幅※以下同じ）26cm、厚さ（最大厚※以下同じ）8cmである。石材は黒色泥岩（粘板岩）。頭部は台形で平坦（剥離加工で調整か）で体部にかけて広がるが右側下部が剥落している。碑面構成は、上から全長の半分近くが主尊（種子）のエリアであり、縦位の二尊配置で上端は一字分近く空白である。上から一字目はタラク、二字目は異体でありバに近似するも一画からの返しからカとみる。薬研彫りだが浅く、本来の彫法も失っているので「薬研彫風」と表現しておく。後述するように室町時代の所産と考えられることを考慮し、タラクを虚空蔵菩薩とみれば三十三回忌の主尊である。カは地藏菩薩とみて地藏信仰とみる。三十三回忌の主尊たる虚空蔵菩薩及び地藏菩薩を供養している。種子の下に、その中心線上に「右[志or意の略字]趣者道菴」と願文を短文で配す。「道菴」が被供養者なのか造立者なのか両者（「逆修」の場合）であるか明確ではないが、「道菴」の三十三回忌供養と考えておきたい。「道菴」は僧侶に多い呼称

であり注目される。その右に願文より高い位置から「十方仏土中 唯一 [乘法]」、左に「無二亦無三 除仏方 [便説]」と妙法蓮華経第一、方便品第二の偈を刻む。

No. 2 は、左側上部を欠損しているが碑面構成からすればわずかであろう。長さ48cm、幅23.5cm、厚さ4.5cmである。青味のある灰白色を呈している。石材は黒色泥岩（粘板岩）。頭部は右側に偏った三角形。全体を五分割して説明すると上から一段目は頭部、二段目右寄りに種子ウーンを配する。その下の上から三段目の右に「万法」、左に「一如」、即ち「万法一如」の偈を配する。上から四段目のほぼ中心軸上に「妙林」と刻まれる。種子は薬研彫りだが本来の彫法を失った「薬研彫風」。大きさも銘文と大差なく、全体的にみるとむしろ「妙林」が目立つ。主尊礼拝供養意識より供養者供養の意識が勝っていることが反映しているのではないだろうか。ウーンは七回忌の主尊である阿闍如来とみる。「妙林」下の埋設部に相当する部分は長さ18cmと短い。

No. 3 は、右側上部が剥落しているがほぼ完形で長さ54cm、幅24.5cm、厚さ4.5cmである。緑味を帯びた灰色を呈しており、石材は黒色泥岩（粘板岩）。頭部は右側に偏った三角形を呈する。碑面上部中央にバン、その下に異体のカを刻む縦位の二尊配置である。彫法は薬研彫りを意識しているが、本来の彫法を相当失っている。カよりやや下がって右に「万法」、左に「一如」の「万法一如」の偈が配されるのであるが、主尊（種子）エリアに偈が入り込んでお

番号	主尊	紀年名	保存状況	形状	石材	長さ	幅	厚さ	種子彫法	銘文	偈(出典)※/は改行	十三仏信仰主尊
1	タラク・カ(異体) 縦位 [虚空蔵+地藏]	なし	右側下部破損するも完形に近い	頭部平坦・下辺に広がる	泥岩(粘板岩)	73	26	8	薬研彫風	右志?趣者道菴	十方仏土中 唯一(乘法) / 無二亦無三 除仏方(便説) [法華経方便品]	タラク(虚空蔵) は三十三回忌相当
2	ウーン [阿闍]	なし	左側上部破損、下部右破損	頭部偏三角形	泥岩(粘板岩)	48	23.5	4.5	薬研彫風・線彫に近く銘文と同じ大きさ	妙林	万法/一如 ※中心線の右・左に配する	ウーン(阿闍) は七回忌
3	バン・カ(異体) 縦位	なし	右側上部破損だが完形に近い	頭部偏三角形・下辺に広がる	泥岩(粘板岩)	54	24.5	4.5	薬研彫風	右志?趣者妙仙/禪尼	万法/一如 ※中心線の右・左に配する	バン(金剛界大日) は十三回忌
4	サク [勢至]	なし	ほぼ完形	頭部半円形・下辺不整に広がる	砂岩	69.5	27.5	15	薬研彫風	妙秀禪尼	なし	サク(勢至) は一周忌
5	キリーク [阿弥陀]・カ	なし	頭部右欠損、左端左側欠損	不明	泥岩(粘板岩)	68	31.5	4.5	薬研彫風	なし	なし	キリーク(阿弥陀) は三回忌
6	エン [焰摩天]	不明	上端切断・右側下部破損	不明	泥岩(粘板岩)	[32]断片	18.5	1.5	薬研彫	不明	不明	
7	サ [観音]	不明	横位 剥落	不明	泥岩(粘板岩)	[35]	[15]	[9]	薬研彫風(浅い)	不明	不明	サ(観音) は百ヶ日
8	イ字三点	不明	斜位 下部欠損	不明	泥岩(粘板岩)	[23]	[15]	3.5	薬研彫風	不明	不明	
9	バン [金剛界大日如来]	不明	種子・偈周辺部片	不明	泥岩(粘板岩)	[29]	19.5	3.5	薬研彫	不明	万法/一如	バン(金剛界大日如来) は十三回忌

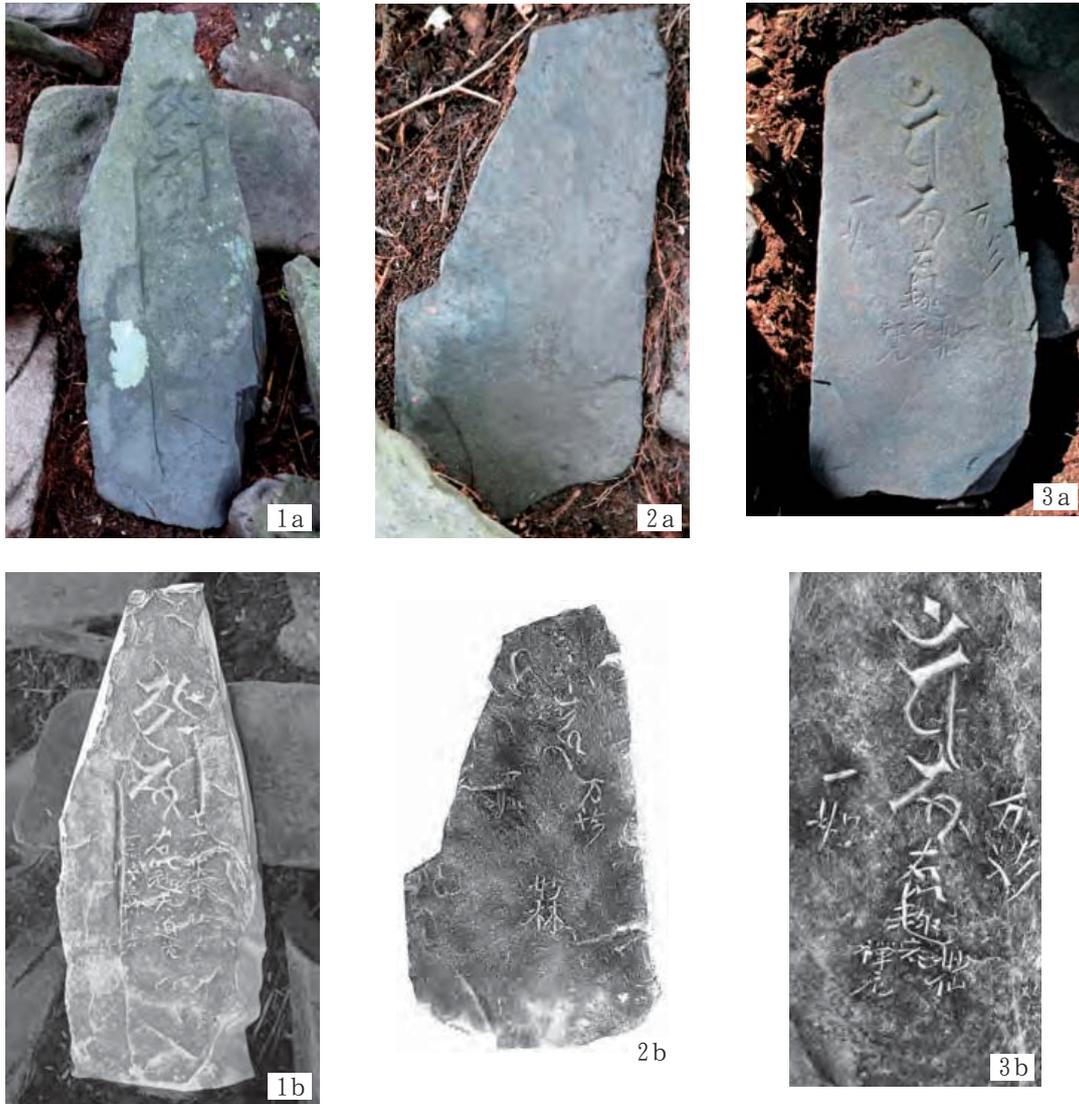
第10図 板碑観察表

り本来的なエリア分けが崩れている。さらにカの直下に「右[志or意の略字]者」と刻み、「者」のレベルの右に「妙仙」、左に「禅尼」の戒名を配する。その下は全体の四分の一弱、14cmと短く、あるいは「奉納」的な設置が考えられる。

No. 4 はほぼ完形で自然石から碑面を意識し、形状を選び取って選択した感がある。長さ79.5cm、幅27.5cm、厚さ15cmである。灰白色を呈し、石材は砂岩。頭部は左に偏った三角形形状を呈する。全体を四分割して説明すると二段目のほぼ中央上部に種子サクが刻まれる。種子は小さく(約5.5cm四方)、二段目の碑面の九分の一に過ぎない。彫法も薬研彫りを意識しているが細目で浅い。三段目の中心軸上部に「妙

秀禅尼」と刻まれる。その下の四段目が埋設部想定エリアで長さ21cmである。サクは勢至菩薩で一周忌の本尊とみる。

No. 5 は頭部右側欠損、末端左部破損であるが全体の形状をほぼ復元できる。長さ68cm、幅31.5cm、厚さ4.5cmである。灰白色に風化している。石材は泥岩(粘板岩)。碑面は剥落が多く、種子も部分的にしか残存していない。種子は全体を三分割して説明すると一段目中央にあり一字目はキリークの下半と思われる。その下にも種子があり、上部の一部しか残存していないが、他の事例からしてカ(地藏菩薩)の可能性もある。すなわち、十三仏信仰を踏まえれば、三回忌の主尊阿弥陀如来と地藏信仰の組み合わせ



第11図 板碑(左からNo.1 a.b(拓本) 2 a.b(拓本) 3 a.b(銘文拓本))



第12図 板碑（上左からNo. 4 a. 5. 6. 7 a b 下左からNo. 4 b 拓本8. 9）

せの可能性も考えられる。

No. 6 はエン（焰魔天・閻魔天）と考えられる種子部分の断片であり、この板碑群が相当な損壊を受けていることを示している。青味がかった暗灰色を呈する黑色泥岩（粘板岩）である。種子の彫りは薬研彫を意識しているが、本来の彫法を失って粗雑な彫りである。

No. 7 は左半分が埋まっている板碑で、原位置付近から倒れた状態の可能性が有る。種子の右側が確認された。サ（観音菩薩）と推測される。薬研彫り風であるが浅く、断面はU字形である。種子の左側（現状の下半）は剥落している。石材は泥岩。サ（観音菩薩）は十三仏信仰においては百か日の本尊である。

No. 8 は板碑の断片であり、この板碑群の損壊を示している。長さ23cm、幅15cm、厚さ3.5cmである。種子はいわゆる「イ字三点」である。彫りは薬研彫を意識しているかのようなようであるが稚拙である。青灰色を呈する黑色泥岩（粘板岩）

である。

No. 9 も板碑の断片であるが種子と偈を確認できる。長さ29cm、幅19.5cm、厚さ3.5cmである。褐色を呈する泥岩（粘板岩）である。種子はバン（金剛界大日如来）で薬研彫りであるが、本来の彫法を失い粗雑さがみられる。偈は右に「万法」、左に「一如」と刻む。バン（金剛界大日如来）は十三仏信仰においては十三回忌の主尊である。

種子について二尊種子（縦位）が3点あり、それぞれタラク、バン、キリークがカと組みあっているのが特徴である。前者は十三仏信仰のそれぞれ三十三回忌、十三回忌、三回忌に相当し、カは地藏菩薩信仰と解した。地藏菩薩は地獄救済の役割が大きく、中世には同体と考えられた閻魔天（No. 6 のエン種子）²³もこれに関連している可能性がある。同様の事例にキャ（十一面観音）とカの二尊種子（縦位）である浅水白山神社（長谷山）の観応二年（1351）銘

板碑がある²⁴。また、サク・サの二尊種子板碑は大上塚²⁵にある。なお3、4は埋設部が短く、浅く立てかける程度の機能も想定される。

銘文の戒名について道菴、妙仙禪尼、妙秀禪尼、妙林が認められる。禪尼については在俗で仏門に入った女性²⁶と考えるべき。妙林も戒名を感じさせる名称であるが後述する曲田板

碑群（藤沢町）では「妙春禪門」とあり、「妙」は女性に限らず、性別も含めて不明である。「禪尼」と対になる「禪門」は未確認である。また、「道菴」の僧侶の可能性は前述した。15世紀における「禪門」「禪尼」については、禪宗の例であるが、遠江で活動した松堂高盛（1431－1505）の語録を分析した廣瀬良弘によれば、「職人・農民」の位階とする²⁷。

ここでは僧侶を導師とする職人・農民層レベルの造塔供養儀礼が行われた証左としておきたい。

(2) 板碑、板碑状石製品の法量

板碑の法量については、ほぼ完形のもの全長48～73cm（No.1は現高73cmで実長は数センチ長いと考えられる）、幅24～32cm、厚さ5～8cmである。板碑状石製品はほとんどが板碑である可能性が高いと考えられる²⁸。板碑と板碑状石製品の中で完形及びほぼ完形から法量について述べる。

長さは37～91cmで81cm未満が大部分である。幅は10～46cmで37cm未満が大部分である。厚さは2～16cmで大部分は3～12cmである。粘板岩のものは2～5cmと薄く、砂岩は16cmと厚いものがある。

なお、板碑状石製品No.57は長さ91cm幅46cm厚さ9cmで長さ、幅が最大のものであるが、急斜面上に落とされたと推定される状態にあり、十分な観察ができていない。

※現状保護のため原則として表裏確認はして保存・形状不明とした箇所がある。
※小数点以下まで計測、0の場合表記せず。

番号	保存状況	形状	石材	長さ	幅	厚さ	備考
1	ほぼ完形 横位	隅丸長方形	砂岩	53	27	8.5	
2	断片 横位	不整形	砂岩	33	21	6.5	
3	基部	不明	泥岩	27	26	5.5	
4	ほぼ完形 横位	不整形長方形	砂岩	62	29	5.5	剥落多
5	ほぼ完形 斜位で立つ	頭部アーチ形	泥岩	25.5	10.5	3.5	
6	ほぼ完形 横位	不明	泥岩	47	22	?	
7	ほぼ完形 横位	不整形長方形	花崗岩	40	12	5.5	
8	左側破損 斜位	不整 末広がり	泥岩	46	28	4	ほぼ浮く
9	ほぼ完形 横位	不整形円形	砂岩	37	34	3	
10	不明	不整形	泥岩	59	18	7	
11	不明	不整形	泥岩	26	19	3~	
12	立位 破損 ずれ	不明	泥岩	30	13	12	
13	ほぼ完形 横位	頭部偏三角長方形	泥岩	48	13.5	6	
14	下半破損か	不明	泥岩	62	33	7	
15	不明	不明	泥岩	52	13	7	節理顕著
16	不明	不明	泥岩	66	21	3	
17	端部破損	不明	泥岩	50	24	8	
18	断片	不明	泥岩	20	19	10	17と同一個体?
19	端部破損 横位	不明	泥岩	54	22	16	
20	幅は原型に近い 横位	長方形	泥岩(粘板岩)	81	37	4.5	青灰色スレート風
21	ほぼ完形 横位	不整形楕円形	砂岩	64	27	4	
22	横位	不整形長方形	砂岩	54	28	7	
23	ほぼ完形 横位	不整形平行四辺形	砂岩	57	24	6	
24	断片 横位	不整形長方形	泥岩(粘板岩)	23	20	1.4	青灰色スレート 周囲に剥片2
25	完形 横位	不整形楕円形	泥岩	44	23	6.5	
26	横位 端部欠損	不整形長方形か	泥岩	45	25	5~	緑味を帯びた青灰色
27	横位	端部方形	泥岩	28	15	8~	灰白色に風化
28	斜位(凹方向) 端部欠損	不明	泥岩	46	24	8~	
29	横位 二つに割れている	不明	泥岩	63	29	3	29a,b
30	横位	隅丸長方形か	泥岩(粘板岩)	55.6	23.5	7	青灰色
31	横位	不明	泥岩	[24]	10	[5]	
32	横位	不明	泥岩(粘板岩)	[50]	11	[8]	29bの下
33	斜位(凹方向) 側面破損	不明	泥岩(粘板岩)	[33]	11	[3]	青灰色
34	斜位(凹方向) 側面破損	不明	泥岩(粘板岩)	[52]	37	[2]	青灰色
35	斜位(凹方向) 破損	不明	泥岩	[32]	22	[2]	青灰色
36	横位	不整形隅丸長方形	泥岩	60	28	[2]	剥落多
37	ほぼ完形 横位	頭部偏三角長方形	泥岩	62	22	6.8	凹凸多 裏面か
38	一部露出 横位	不明	泥岩	[22]	17	[2]	
39	断片 横位	不明	泥岩	22	17	[2]	
40	斜位 ほぼ完形	頭部偏三角長方形	花崗岩	47.5	26	8.5	上面 ほぼ平坦
41	側面露出	不明	泥岩	53.5	11	[6]	断面形板状
42	側面露出 端部一部破損	不明	砂岩	60	13	9	片面に平坦面か
43	ほぼ完形 横位	不整形長方形	花崗岩	45	20	[7]	下部にコケがなく埋まっていた可能性
44	頭部のみ露出	不明	泥岩	[16]	19	[2]	
45	ほぼ完形 横位	頭部偏三角長方形	花崗岩?	38	19	10	
46	ほぼ完形 横位	不整形長方形	砂岩	54	24	14	厚い
47	横位	断片	泥岩	27	28	5	
48	横斜位	不明	泥岩	[41]	24	[2]	
49	横位	断片?	砂岩	[38]	19	[2.5]	
50	横位	断片?	泥岩	42	11	[4]	
51	頭部?のみ露出	不明	泥岩?	8.5	20	3.5	倒木下
52	頭部?のみ露出	不明	泥岩?	[18]	[22]	[3]	倒木下
53	横位	不明	泥岩?	37	17	[1]	
54	横位 完形か	頭部偏三角長方形	泥岩?	61	25	[2]	
55	頭部?のみ露出	不明	砂岩	34	13	7.5	
56	頭部破損	不明	泥岩	42	28	3.5	
57	斜面にのる	洋梨形	泥岩	91	46	9	上方より廃棄か コケ密生
58	斜面にのる	不整形三角形	泥岩	72	35	11	上方より廃棄か 剥離整形?
59	斜面にのる	不整形三角形	泥岩	76	26	10	上方より廃棄か
60	斜面にのる	末広がり隅丸長楕円形	泥岩	62	20	5	青灰色 濡れると黒色
61	斜面にのる	不整形長方形	花崗岩	53	22	11	
62	斜面にのる	不明	花崗岩?	[15]	31	7	ほとんど埋没
63	斜面にのる		花崗岩	30	18	10.5	

[] 現存法量

第13図 板碑状石製品表

(3) 石材

板碑及び板碑状石製品については、全体としては泥岩47点、砂岩12点、花崗岩質岩7点である（石材が不明確なものは除く）。種子が確認された9点の内5点は、接触変成作用を受け、斑点状の変成鉱物が生じた、黒色泥岩（粘板岩）で、登米層の泥岩に相当する可能性がある。同様のものは板碑状石製品と併せると15点である。泥岩と砂岩については大沢層、風越層、伊里前層に由来する可能性があり、花崗岩質岩については入谷地区の花崗岩閃緑岩層あるいはそれに関連する花崗岩質岩に由来する可能性

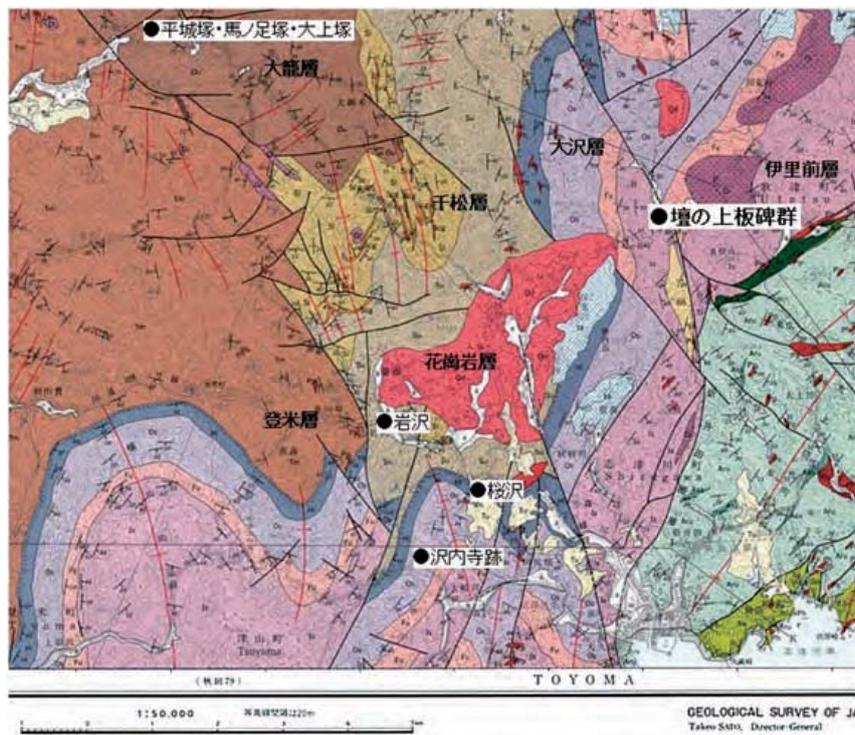
がある。産総研地質調査総合センター地質図データによると弘川地区の当該板碑群周辺は概ね伊里前層に相当するが、ほぼ6km圏内に伊里前・大沢層の頁岩・砂岩、花崗岩層、登米層の粘板岩・頁岩層が分布することから、石材はこれらから、板状の石材を選択した可能性がある²⁹。

7 偈について

今回、確認された9点の板碑の内、4点に2種の偈（偈頌）が認められた。A「十方仏土中 唯一（乘法）／無二亦無三 除仏方便説」（法華経方便品第二）が1点。B「万法一如」が3点である。Aは地上高73cm、Bの2点は50cm前後と対象のランク差を感じさせる。

(1) 「十方仏土中 唯一乘法 無二亦無三 除仏方便説」の分布

「十方仏土中 唯一乘法 無二亦無三 除仏方便説」は、日本仏教の中で重視された法華経³⁰の本質である「一仏乘」（一切の衆生が成佛できる）³¹を示す偈として板碑に多用されて



第14図 周辺の地質と板碑群

（産総研 5万分の1地質図幅「津津川」 <https://gbank.gsj.jp/geonavi/>）

いる³²。東北地方では類例が多く、宮城県内では鎌倉期の事例として仙台市四郎丸の落合観音堂板碑群中の正安（1299-1302）銘板碑などがある。鎌倉末期から南北朝期に類例が増加し、本板碑群西方約14kmの登米市中田町浅水長谷山の元徳三年（1331）銘板碑、同石森前田の応安五年（1372）銘板碑、同浅水長谷山の明德（1390-1392）銘板碑がある。室町時代に入ると石巻市東福田の山口家板碑群（4基）、同じく石巻市の高木観音堂板碑群（3基）など15世紀前半から半ばにかけて石巻地方、旧北上町・河北町域で類例が多い³³。南三陸町内でも戸倉寺浜板碑群中に康永四年（1345）銘板碑にみられる。

(2) 「万法一如」系偈板碑の分布と時代

「万法一如」偈板碑を現段階で集成しえたのは52点である。ただし、小山田板碑群（東和町）の2基のように「一如」のみ確認のものは除外しているので数は増えそうである。その分布は、東は壇の上板碑群のある田東山西麓から西は長谷山（中田町浅水）周辺、南は南三陸町入

谷、北は、北上沿いの曲田の範囲に大きなまとまりがある。複数個所が集中するのが入谷と長谷山周辺の北上川沿いである。その北方、北上川沿いに日形高山、一関方面への道沿いに金蔵寺（花泉町北十軒街（一関市）及び栗駒地区がある。紀年銘のある板碑17点から見ると15世紀前葉から中葉までは前述の大きなまとまりに相当する。文明十三年（1481）には北上川支流金流川の金蔵寺の板碑に派生する。この板碑は「積伝韶公菴主」という弟子に「公」の敬称で呼ばれる菴の僧侶である。さらに延徳二年（1490）には南北朝期の板碑群が形成されていた北十軒街（一関市）に達する。16世紀前葉に入ると北上川沿いの日形高山で無紀年も含めて5基があり、栗駒地区は2地点各1基のみである。紀年銘を西暦に換算して1490年から次の1520年の間に30年の空白があるので前者を第1期、後者を第2期とする。1416年銘の板碑は中田町浅水長谷山（長谷寺・白山神社）と志津川新井田館跡（第17図・年号は解釈の余地がある）にあり、これを結ぶ本吉街道沿いに紀年銘板碑が分布する。志津川から内陸に入った入谷は北方、坂の

貝峠を越えて払川から北方の馬籠に至る分岐点であり、弥惣峠を越えて鱒淵、米谷に至る山道もある要衝である³⁴。一帯に「万法一如」偈板碑が桜沢・岩沢、沢内寺跡板碑群と集中する。大籠から北上川方面に下る鱒淵川沿いの大上塚・馬ノ足塚・平城塚板碑群は年号不明ながら「万法一如」銘板碑の集中地帯である。さらに滝ノ沢板碑群を経て再び浅水長谷山に戻る「回廊の道」の感がある。馬籠からさらに北方の大籠の二股川流域の道にも大松寺跡・西上沢切明・三経塚板碑群と「万法一如」銘板碑は少数ながら含む板碑群を経て再び浅水長谷山方面に道は還流してくる。これらの年号のない「万法一如」銘については、第1期に含まれ、15世紀前葉から中葉の年代の可能性がある。また、浅水長谷寺の北上川対岸約2.7kmの楼台根方板碑群の「万法一如」銘板碑は永享十二年（1440）、長谷寺北方約5kmの北上川沿いの上沼小塚の「万法一如」銘板碑は永享十一年（1439）である。その北方約5kmの北上川の岬状先端に立地する曲田板碑群（藤沢町）に年代不明の「万法一如」（1基）、「万法一如 皆是大日」（2基）



第15図 「万法一如」系偈板碑の分布

(国土地理院地図 <https://maps.gsi.go.jp/#12/38.706678/141.446400/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0l0u0t0z0r0f0> を下図として作成)

「一念菩提 金剛三密 万法一如 皆是大日」
 (1基) 銘板碑がある。これらの「万法一如」の言葉を含む偈を有する板碑(「万法一如」系偈板碑)は長谷山周辺北上川沿い及び鱒淵川・二股川流域への分布を主体とするという傾向を持つのであるが、長谷山はいわゆる「北上川の大迂回部」にある標高51mの山で坂上田村麻呂創建伝承を持つ長谷寺³⁵(天台宗)を中心とする霊山であり、その宗教勢力の関りとその布教ルートの可能性が浮上してくる。

第2期は紀年銘の1520年から1533年にかけて北上川流域の花泉町日形高山板碑群及び栗駒地

区(大同寺跡板碑群、玉ノ井館跡館跡)にある。第1期の偈は現在確認しえたものはすべて「万法一如」のみであるが、第2期では、「皆是大日」と続くものが年号の明らかな5点の内4点にある。第1期に属するとした沢内寺跡(南三陸町)の3点の内、南三陸町史では嘉吉四年(1441)銘板碑について「万法一如 皆是大日」とする。現地確認した筆者の拓本(銘文)は第18図の通りであり、中央に「嘉吉二二年」、右行に「万法一如」とその下に小さく「敬 白」(「敬」は略字とみる)左行に「道金禪門」、その下に「三月」(「月」は異体字)と嘉吉四年に続く。

	市町	名称	紀年銘	西暦	種子	偈	願文	長さ	備考
1	登米市	長谷山	応永廿三年	1416	バン	万法一如	妙永禪尼	61	中田町
2	南三陸町	新井田館跡	応永廿三年十月日	1416	ウーン	万法一如	蓮生禪門	63	「応永」を合体字と解した。二年と解すれば1398~
3	南三陸町	桜沢	応永廿五年十一月日	1418	カン	万法一如		不明	現地未確認
4	登米市	長谷寺	永享六年□月八日	1429	カ	万法一如		[63]	中田町長谷山
5	南三陸町	沢内	永享七年十一月日	1435	バイ	万法一如	右意趣者	60	沢内寺跡
6	登米市	小塚	永享十一年十二月廿一日	1439		万法一如	法慈庵主		中田町上沼
7	登米市	楼台根方	永享十二年二月廿九日	1440	不明	万法一如	妙一禪尼	68	東和町米谷天神前
8	南三陸町	沢内	嘉吉四年三月	1444	カーン	万法一如	道金禪門 敬白	52	沢内寺跡
9	登米市	浅水白山神社	享徳四年七月吉日	1455	バン	万法一如	道元禪門為也	55	中田町長谷山
10	一関市	旧曲田公葬地	長禄四年庚辰	1460	バン	万法一如	道金禪門	70	藤沢町黄海
11	一関市	金森金蔵寺	文明十三年正月十一日	1481	ハーンク	万法一如	積伝韶公誓主廿七天忌	68	花泉町花泉寺沢
12	一関市	日形高山	永正十七年十月廿四日	1520	タラーク	万法一如 皆是大日	道永禪門三十三回忌	不明	花泉町→盛岡市に移設
13	一関市	日形高山	大永五年五月□日	1525	タラーク	万法一如 皆是大日		不明	花泉町→行方不明
14	一関市	日形高山	大永五年	1525	不明	万法一如 皆是大日	道口禪門三十三回忌	不明	花泉町→行方不明
15	栗原市	大同寺跡	大永	1521-1528	不明	万法一如	口禪尼	48	栗駒鳥沢
16	栗原市	玉ノ井館跡	天文二年六月九日	1533	タラーク	万法一如 皆是大日	道秀禪門	46	栗駒中野
17	南三陸町	壇の上	なし		ウン	万法一如	妙林	48	
18	南三陸町	壇の上	なし		バン・カ(異体) 縦位	万法一如	右趣者 妙仙禪尼	54	
19	南三陸町	壇の上	なし		バン	万法一如		[29]	断片
20	南三陸町	沢内	なし		サク	万法一如	右意趣者 覚円禪門	58	沢内寺跡
21	登米市	馬ノ足塚	なし		キリーク	万法一如	道光禪門	48	東和町米川 金箔
22	登米市	馬ノ足塚	なし		ア	万法一如		42	東和町米川
23	登米市	馬ノ足塚	なし		バーンク	万法一如	禪門	64	東和町米川
24	登米市	馬ノ足塚	なし		サ	万法一如		62	東和町米川
25	登米市	馬ノ足塚	なし		キリーク	万法一如	妙珍禪尼	53	東和町米川
26	登米市	馬ノ足塚	なし		サク	万法一如 今日所訪		53	東和町米川
27	登米市	平城塚	なし		バン	万法一如	道行禪門	47	東和町米川
28	登米市	平城塚	なし		バン	万法一如	道清禪門	63	東和町米川
29	登米市	大上塚	なし		バン	万法一如	道明禪門	79	東和町米川
30	登米市	大上塚	なし		アン	万法一如	用繼禪尼	80	東和町米川
31	登米市	大上塚	なし		カン	万法一如	口禪門	78	東和町米川
32	登米市	大上塚	なし		サク	万法(一如)	道口禪口	69	東和町米川
33	登米市	大上塚	なし		キリーク	万法一如	如円禪尼	60	東和町米川
34	登米市	大上塚	なし		サ	万法一如		60	東和町米川
35	登米市	大上塚	なし		キリーク	万法(一如)		60	東和町米川
36	登米市	大上塚	なし		サク	万法□□		56	東和町米川
37	登米市	三経塚	なし		キリーク	万法一如	清童子	63	東和町米川綱木
38	登米市	滝ノ沢	なし		サク	万法一如	妙西禪尼	68	東和町米谷
39	登米市	小山田	なし		カン	万法一如	妙竹禪尼	47	東和町錦織入沢
40	登米市	小山田	なし		バン	万法	道口禪口	34	東和町錦織入沢
41	登米市	長谷寺	なし		ア	万法一如	口秀禪門	51	中田町長谷山
42	登米市	長谷寺	なし		不明	万法一如		[55]	中田町長谷山
43	登米市	上沼八幡山	なし		キリーク	万法一如	性祐禪門	45	中田町上沼
44	登米市	上沼八幡山	なし		バン	万法一如	妙心禪尼	50	中田町
45	一関市	大松寺跡	なし		サク	万法一如		63	藤沢町大籠
46	一関市	曲田	なし		キリーク	万法一如	道林禪門 敬白	59	藤沢町黄海下曲田
47	一関市	曲田	なし		アーンク	(万) 法一如 皆是大日	妙春禪門	53	藤沢町黄海下曲田
48	一関市	曲田	なし		バン	万法一如 皆是大日	妙金禪尼	59	藤沢町黄海下曲田
49	一関市	曲田	なし		タラーク	一念菩提 金剛三密 万法一如 皆是大日	道永禪門	45	藤沢町黄海
50	一関市	日形高山	なし		バン	万法一如(板碑右欠損)	妙光大師	30	花泉町
51	一関市	日形高山	なし		ウーン	万法一如(板碑上下欠損)	妙春公大徳	30	花泉町
52	一関市	日形高山	なし		タラーク	一念菩提 金剛三密 百个千如 皆是大日	妙口禪尼	不明	花泉町→盛岡市に移設
53(参考)	登米市	西上沢切明	なし		サ	皆是大日	道隆上座	58	東和町米川

出典：1 東国板碑データベース(国立歴史博物館) 2 佐沼高等学校郷土部「中田町における板碑調査」『平瓶11』 3 『中田町の板碑』(2004) 中田町教育委員会
 4 『歴史の標』(1991) 志津川町教育委員会 5 東和町郷土史研究会『東和町のいしふみ』(2005) 東和町教育委員会 6 『藤沢町の板碑』(2002) 藤沢町教育委員会
 7 『花泉町文化財調査報告書 第4集』(1974) 花泉町教育委員会 8 佐々木徹「北上川流域にひろがる霊場」『中世の聖地・霊場』(2006) 高志書院 ※52については室野秀文氏教示。

第16図 「万法一如」系偈板碑表



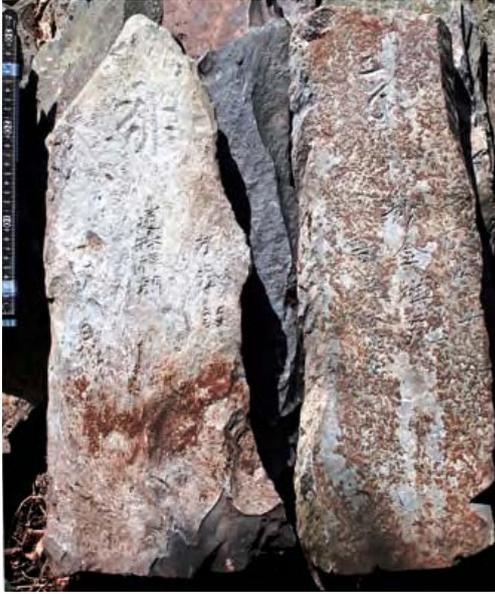
第17図 新井田館跡板碑

第18図 沢内板碑群嘉吉4年
銘板碑第19図 馬ノ足塚板碑群
A1-6

したがって「皆是大日」は認められないと判断した。銘文の彫りは稚拙で、専門の技術者とは思えない。沢内板碑群の板碑は種子のみのものが多いが、みな小型で彫りの手法は稚拙なものが多い。数は南三陸町最大で100基を越え、年号の分かる板碑は15世紀前半である。また、馬ノ足塚板碑群についても『東和町のいしぶみ』³⁶ではA1-6について「皆是大日と続く」とあるが、現地確認では「万法一如」と「道光禪門」を上下二段に各左右に配している（第19図）。このような配置は壇の上板碑群と共通する。ただし、馬ノ足塚板碑群には「万法一如 今日所訪」（二段配置）の偈があり（実見 第29図2）、群の最新年号が延徳二年（1490）である。

次に年代が明確ではない曲田板碑群（藤沢町）³⁷の「万法一如」系偈板碑の位置付けが問題となる。5基の「万法一如」系偈板碑が確認され、年号の分かるものは長禄四年（1460）である。注目すべきことに年号不明ではあるが「万法一如」の他に「万法一如 皆是大日」「一念菩提 金剛三密 万法一如 皆是大日」があることである。第2期グループのうち日形高山板碑群の「万法一如」系板碑は欠損していないものは「万法一如 皆是大日」であり、さらに参考として表に掲載したものに「一念菩提 金

剛三密 百个千如 皆是大日」があり、曲田の「一念菩提 金剛三密 万法一如 皆是大日」とは「百个千如」を「万法一如」に入れ替えた形になっている。なお、「百个千如」の「个」は「界」の略字で、「百界千如」である。曲田板碑群は140基からなる大板碑群で、紀年銘からの年代は貞和二年（1346）から応仁三年（1469）板碑であり、近接する経塚付近では永正十六年（1519）銘の板碑もある。このような傾向からすれば曲田板碑群の「一念菩提 金剛三密 万法一如 皆是大日」、「万法一如 皆是大日」銘板碑は15世紀中葉から16世紀前葉頃の可能性もあろう。偈「万法一如」系（「万法一如」に続く「皆是大日」などの偈を含めた概念）板碑は長谷寺から北上川流域を北上して曲田・日形高山板碑群（178基）に至る主要な布教ルートを示している可能性がある。それは北上川流域の要衝への動きではないだろうか。年代的に整理すれば「万法一如」偈は15世紀前葉から中葉期に長谷山周辺の北上川沿いから田東山西麓一帯で比較的多数用いられ、15世紀後葉に金流川沿い平泉方面への街道の要衝に入る「万法一如 皆是大日」の偈は15世紀後半に曲田で出現した可能性があり、16世紀前葉には北上川日形の川湊と栗駒に到達して、板碑の偈としては終息を迎えるということになる³⁸。



第20図 曲田板碑群の「万法一如」系偈板碑



第21図 沢内板碑群応永24年板碑

(3) 偈「万法一如」銘と「十方仏土中 唯一乗法 無二亦無三 除仏方便説」銘板碑の組み合わせを持つ板碑群

室町期を主体とし、両者の偈を持つ板碑群としては藤沢町の大松寺跡板碑群（144基）³⁹が挙げられる。両者の偈とも一例ずつである。また、東和町の滝ノ沢板碑群（11基）は応安六年（1373）から応永十一年（1404）までの紀年銘があり、「十方国土中。」偈を有する板碑は康暦二年（1385）銘で、この板碑群では最も高い118cmのものである。「万法一如」銘板碑は「妙清禅尼」の願文を持つが年号が刻まれていない。15世紀初頭のものであれば「万法一如」銘板碑の最初期のものであり、長谷山（長谷寺）に北東約5kmと近い位置関係から注目される。

(4) 「万法一如」の由来

加藤政久氏の『石仏偈頌辞典』によると「万法一如」の出典は『景德伝燈録卷第三十』（道原）の『三祖僧璨大師信心銘』（僧璨は隋の6世紀の僧）の「心若不異 萬法一如 一如体玄 兀爾忘縁」（心若し異ならざれば、万法一如なり。一如体玄なり、兀爾（こつじ）として縁を忘ず）とする。そうなると弘川に西光寺（曹洞宗）が、永享元年（1429）、水沢の正法寺四世中山良用和尚により開創されたという寺伝が活きてくる

し、この年、登米市米川の大慈寺も中山良用和尚により天台宗から改宗して再興していることも「万法一如」の分布と照合してくることとなり、正法寺四世中山良用和尚の土豪層をリーダーとする新興勢力の帰依者獲得のための新たな布教戦略として天台宗の伝統である造塔供養を引き継いだという発想も生まれてくる。しかし、その場合、応永二十三年（1416）には「万法一如」銘板碑の造立が始まっているので整合性に問題があるし、長谷寺など天台宗勢力から産み出される可能性を検討する必要がある。

沢内板碑群（南三陸町入谷）では「万法一如」銘板碑を3基含む。壇の上板碑群の南西6.5km 標高約67mの志津川から羽沢峠を越えて北上川の要衝日根牛に至る街道の山岳地帯の入口に位置する。「アビラウンケン」（大日報身真言）「キャカラバア」（五大種子）を刻んだ板碑があり密教色が強いが、「応永（一字に表現）二四年」（1417）銘板碑の偈「修此三昧者現證仏菩提心」銘板碑が注目される。SATDB（大正新脩大蔵経データベース）検索によるとこの偈に近似するのは「修此三昧者現證仏菩提 菩提心云。」（『真言宗即身成佛義問答一卷』）である。この「修此三昧者現證仏菩提」は著名な空海の『即心成仏義』の中にあり、『金剛頂経』に説く。この三昧を修するものは、現に仏の菩提

を証す」⁴⁰という意味である。いうまでもなく空海の『即心成仏義』は真言宗の基本的な書であり多くの関連書がある。「菩提心」というフレーズを伴うもので最も年代が近いものとしては頼瑜（1226-1304）の『大日経疏指心鈔』がある。頼瑜は真義真言宗教学の大成者として知られる真言僧である。また、覚鑿（『真言宗即身成佛義章』『心月輪秘釋』）、信証（『住心決疑抄』）、重誉（『秘宗教相鈔』）、房覚（『未決答釈』）といった12世紀に活躍した真言宗僧の著作に見られる（SATDB）ので、この偈の使用について真言宗寺院が関わった可能性も浮上してくる。ただし、前述の加藤政久氏の「万法一如」の引用として、『往生要集』で著名な源信（天台宗942-1017）の『万法甚深最頂仏心法要』『真如観』や修験道の『修験秘奥鈔卷下』があるのは見過ごせない。また、天台宗の光宗（1276-1350）の『溪嵐拾葉集』に「森羅萬法ヲ一如」とあり、さらに三論宗の永観（1033-1111）の撰『往生拾因』、浄土宗の光雲明秀（15世紀）の『愚要鈔』にもある（SATDB）。天台宗他においても「万法一如」が共有されている。禅宗のみならず、汎用性のある短句として選ばれたのではないだろうか。

(5) 「万法一如 皆是大日」の由来

偈「万法一如 皆是大日」銘板碑は日形高山や栗駒の事例から年代の確実なところでは16世紀に入って登場する。ただし西上沢切明板碑群の文明五（1473）年銘板碑の存在や下曲田板碑群の年代と「万法一如」系偈板碑の北上傾向から15世紀後半には登場している可能性がある。この偈そのものの出典は不明ながら「万法一如」「大日」のキーワードでは安然『胎藏金剛菩提心義略問答鈔』に「如來秘密境界眞俗圓融萬法一如」と仁空『遮那業安立章』に「如來秘密境界眞俗圓融萬法一如」であり両者は同文である（SATDB）。この場合の「大日」は「大日経」、大日如来である。「皆是大日」も安然『真言宗教時義』に「九界有情陰界入等皆是大日如来住處」、仁空『遮那業安立章』に「是故八葉皆是大日如来一體也」とある。安然（841-

915）は天台密教の大成者と知られ、仁空（実導1309-1388）は浄土宗西山派の学僧であるが天台密教に通じており、安然の思想の後継者としての評価もある⁴¹。また、真義真言宗の開祖である覚鑿（1095-1144）の『五輪九字明秘密釋』では「皆是大日如来」と「万法則五智」などとの組み合わせである。「皆是大日」のフレーズ自体がインドの真言密教僧で訳経者として名高い善無畏（637-735）の『三種悉地破地獄轉業障出三界秘密陀羅尼法』に「是故八葉皆是大日如来一體也」などとあるのが引き継がれたものと考えられる。いずれにせよ「万法一如 皆是大日」は密教系の偈として考えられる。なお、日形高山には「一念菩提 金剛三密 百个千如 皆是大日」銘板碑があるが、「百界千如 大日 一念菩提」のキーワードは天台宗僧光宗の『溪嵐拾葉集』（文保二年1318年）や真言宗の著作にみられにもみられこの板碑群形成に密教の宗教勢力がかかわったとすることに矛盾はない。

なお、曲田板碑群には年号のない「一念菩提 金剛三密 万法一如 皆是大日」偈があるが、「金剛三密 一念 菩提」のキーワードで不空『大乘瑜伽金剛性海曼殊室利千臂千鉢大教王経』と杲寶「大日経疏演奥鈔」がSATDBで見出すことができる。不空は密教付法第6祖とされ、空海に法を伝えた恵果の師であり⁴²、杲宝（1306-1362）は南北朝期の真言教学の代表的な学僧である⁴³。しかし、第三天台座主円仁の『金剛頂大教王経疏』に「金剛三密」がある（SATDB）ことからすれば広く密教の産物としておきたい。

(6) 偈「万法一如」と他の偈との関係——「是法平等 無有高下」偈など

近隣の板碑群において偈「万法一如」とともに使われる確率の高いものに金剛波羅蜜経の「是法平等 無有高下」（この法は平等にして高下有ること無し⁴⁴）がある。壇の上板碑群では確認されていないものの、沢内寺跡（南三陸町）、馬ノ足塚・大上塚・平城塚（登米市東和町）、長谷山（登米市中田町）、大松寺跡・曲田（一関市藤沢町）板碑群で確認される。偈「是

番号	板碑群	年代(紀年銘)	総数	偈	万法一如	出現率	他の偈(全文は凡例参照()回数)	備考
1	壇の上	不明	72		3	75	1 十方仏土中	
2	沢内寺跡	応永11年(1404) - 宝徳2(1450)	75	9	2	22	4 是法平等 2 修此三昧者 3 一切天人 5 無智人中	推定100基以上
3	馬ノ足塚	元徳3年(1331) - 延徳2(1490)	46 (『町史』)	9	5(万法一如 今日所訪1)	55	4 是法平等(2) 6 応無所住 7 具足神通力 34 草木国土	『東和町のいしふみ』では33基を掲載
4	大上塚	応永10(1403) - 永享8(1436)	83	18	8	44	4 是法平等(3) 6 応無所住(2) 8 深入禪定(2) 9 今日所訪	基数は『東和町のいしふみ』による。「県遺跡地名表」では87基
5	平城塚	応永(1394-1427) - 文明10(1478)	41	10	2	20	4 是法平等(3) 6 応無所住 9 今日所訪(2)	基数は『東和町のいしふみ』による。「県遺跡地名表」では126基
6	大松寺跡	応永2(1395) - 文明3(1471)	144	8	1	13	4 是法平等 6 応無所住 1 十方仏土中 7 具足神通力	
7	曲田	貞和2(1346) - 永正16(1519)	140	21	4	19	4 是法平等 6 応無所住(2) 9 今日所訪 5 無智人中 11 百界千如 12 諸法実相 14 一仏二仏 15 善惡不二 16 凡所有相 17 若有聞法者	曲田経塚を含めた
8	長谷山	延慶三年(1310) - 文龜二年(1503)	159	55	5	9	4 是法平等(8) 6 応無所住(3) 1 十方仏土中(5) 8 深入禪定 10 造作五逆罪 12 諸法実相(3) 17 若有聞法者(2) 18 一仏成道(2) 21 衆生有苦 22 一切善惡 23 大日如来 24 四智圓明受 25 火天□□大日如来 26 三界唯一心 27 今此三界 29 無佛仏界度衆生 30 生死事大(2) 31 諸仏念衆生(2) 32 澍甘露法雨 33 光明遍照	佐沼高等学校郷土部「中田町における板碑調査」『平瓶11』長谷寺など長谷山一帯を含める

※「偈」には真言含 ※「万法一如」は「万法一如系」偈板碑

- 凡例 1 十方仏土中 唯一乗法 無二亦無三 除仏方便説(法華経方便品)
 2 修此三昧者現證仏菩提心(類聚『大日経疏指心鈔』)
 3 一切天人 皆应供養(法華経宝塔品)
 4 是法平等 無有高下(金剛般若波羅蜜經)
 5 無智人中、莫説此經(法華経譬喻品) ※沢内では「之」
 6 応無所住 而生其心(金剛般若波羅蜜經)
 7 具足神通力 広修智方便(法華経 觀世音菩薩普門品)
 8 深入禪定 見十方仏(法華経安樂行品)
 9 今日所訪(亮禪・亮尊「白宝口抄」?) ※「万法一如」
 10 造作五逆罪 常念地藏尊 遊戲諸地獄 決定代受苦(平康類『宝物集』)
 11 百界千如 皆是大日(安然『真言宗教時義』)
 12 諸法実相(法華経ほか)
 13 我之名号 一經其耳 衆病悉除 身心安樂(薬師經) ※下曲田では二句まで
 14 一仏二仏三四五仏(金剛般若波羅蜜經)
 15 善惡不二 邪正一如(有範『大日経疏妙印鈔』 有範『大日経疏鈔』光宗『溪嵐拾葉集』などSATDB)
 16 凡所有相 皆是虚妄(金剛般若波羅蜜經)
 17 若有聞法者 無一不成仏(法華経方便品)
 18 一仏成道 親見法界、草木国土、皆悉成仏(道達『摩訶止観論弘決纂義』)
 19 現世安穩 後生善処(法華経薬草喻品)
 20 真言不思議 觀誦無明除(一行『字母表』空海『般若心経秘鍵』)
 21 衆生有苦 三称我名 不往救者 不取正覺(源信『弘猛海慧經若有』『往生要集』)
 22 一切善惡 都莫思量(子璿『起信論疏筆削記』)
 23 大日如来
 24 四智圓明受 法樂前仏後仏鉢(清暉『金剛頂發菩提心論私抄』ほか)
 25 火天□□大日如来(良祐「火天者是レ大日如来」『三昧流口傳集』)
 26 三界唯一心 心外無別法(大方広仏華嚴經)
 27 今此三界 皆是我有 其中衆生(法華経譬喻品)
 28 諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅爲樂(大般涅槃經)
 29 無仏世界度衆生 今世後世引導(仏説延命地藏菩薩)
 30 生死事大 無常迅速(北海『六壇増經』か)
 31 諸仏念衆生 衆生不念仏 父母常念子 子不念父母(覺鑪「経に曰く」『孝養集』)
 32 澍甘露法雨 滅除煩惱焰(法華経觀世音菩薩普門品)
 33 光明遍照 十方世界 念仏衆生 撰取不捨(觀無量壽經)
 34 草木国土 悉皆成仏(安然『樹定草木成仏私記』)
 出典：加藤政久『石仏偈頌辞典』(1990) 統統石仏偈頌辞典(1993) 国書刊行会を主とし、SATDBも参考にした。

第22図 近隣板碑群における「万法一如」偈とその他の偈

法平等 無有高下」銘板碑の分布は石巻地方まで分布を確認しているが、石巻市では長禄三年(1459)に湊地区と文明五年(1473)の高木地区例⁴⁵のみ(1992年段階)であり、旧河北町では応永九年(1402)初見から応仁二年(1468)で7例を数える。北上町では応永二十年(1413)である。「万法一如」銘板碑分布地内では長谷山例が最も古く康永六年(1347)銘板碑である⁴⁶。また、長谷山一帯の確認例が10例と最も多い。続くのは南三陸町戸倉寺浜の文和5年(1356)年銘銘板碑である。したがって年代的には偈「万法一如」に先行し、分布・密度は重なり、より広く、同じところに終息となる。南北朝期には「金剛波羅蜜經」から簡潔な板碑用の

偈として「応無所住 而生其心」(まさに住する所なくして、その心を生ずべし⁴⁷)と「是法平等 無有高下」が選り取られるが室町期においては、加えて、より簡潔な偈「万法一如」が登米東部から田東山西麓の小型板碑群⁴⁸に使われる傾向がある。「応無所住 而生其心」「是法平等 無有高下」銘板碑の集中は禅宗の進出の一環として理解する見方もあり⁴⁹、その流れでみた場合、「万法一如」は、造立層拡大のためのさらなる簡素化と密教を導入した禅宗の産物としてみることも可能である。しかし、「金剛波羅蜜經」は天台宗も重用する⁵⁰ので、宗派の判断には「上座」「禪師」などの銘文用語との突合せが必要である。

番号	板碑群	所在	西暦	備考
1	長谷山	登米市中田町浅水長谷山	1347	
2	寺浜	南三陸町戸倉寺浜	1356	
3	ニツ木	登米市中田町石森ニツ木	1382	
4	鳥喰	登米市中田町浅水鳥喰	1384	
5	長谷山	登米市中田町浅水長谷山	1390	長谷寺
6	二良根	登米市東和町錦織二良根	1392	
7	滝ノ沢	登米市東和町米谷大沢	1393	
8	滝ノ沢	登米市東和町米谷大沢	1393	
9	寺浜	南三陸町戸倉寺浜	1393	
10	二良根	登米市東和町錦織二良根	1395	
11	長谷山	登米市中田町浅水長谷山	1396	長谷寺西麓
12	長谷山	登米市中田町浅水長谷山	1396	
13	大松寺跡	一関市藤沢町下野在家	1398	
14	長谷山	登米市中田町浅水長谷山	1401	長谷寺西麓
15	寺浜	南三陸町戸倉寺浜	1404	
16	寺浜	南三陸町戸倉寺浜	1406	
17	長谷山	登米市中田町浅水長谷山	1407	
18	長谷山	登米市中田町浅水長谷山	1413	長谷館山
19	長谷山	登米市中田町浅水長谷山	1415	長谷寺西麓
20	馬ノ足塚	登米市東和町米川馬ノ足	1418	
21	華足寺	登米市東和町米川小山下	1418	
22	大上塚	登米市東和町米川馬ノ足	1422	
23	曲田	一関市藤沢町下曲田	1422	
24	小山田	登米市東和町錦織小山田	1425	
25	大上塚	登米市東和町米川馬ノ足	1427	
26	長谷山	登米市中田町浅水長谷山	1430	
27	薬師堂	登米市米山町善王寺森ノ腰	1431	
28	小山田	登米市東和町錦織小山田	1433	
29	小山田	登米市東和町錦織小山田	1438	
30	長谷山	登米市中田町浅水長谷山	1456	長谷寺西麓
31	東昌寺	登米市東和町米谷寺沢	1459	
32	峯	登米市東和町米谷峯	1463	
33	峯	登米市東和町米谷峯	1463	
34	蕪木	登米市石越町東郷子蕪木	1467	
35	小山田	登米市東和町錦織小山田	1470	
36	平城塚	登米市東和町米川軽米	1474	
37	春日神社	栗原市栗駒町畑中	1477	
38	平城塚	登米市東和町米川軽米	1478	
39	小山田	登米市東和町錦織小山田	1478	
40	城内	登米市東和町錦織城内	1480	
41	馬ノ足塚	登米市米川馬ノ足	1490	

出典：国立歴史博物館板碑データベース・東和町教育委員会『東和町の板碑』（2005）・藤沢町教育委員会『藤沢町の板碑』（2002）

第23図 紀年銘のある「是法平等」銘板碑 (登米市・南三陸町・栗原市・一関市南部)

(7) 近隣板碑群との法量比較

壇の上板碑群と同じく「万法一如」偈を持つ法量比較を沢内板碑群、馬ノ足塚板碑群、大松寺跡板碑群について行う。これらは14世紀末から15世紀を造立主体時期とする共通項を持つ。石材は十分な検討ができていないが周辺の頁岩・粘板岩を主体としている。沢内板碑群（南三陸町）は南西約6.5km、坂の貝峠を越えて入谷に下り、戦国期葛西氏の本拠地である登米方面への山道入口付近にあり、寺跡伝承がある。紀年銘は15世紀前半におさまり、100基以上と推定される南三陸町域における最大の板碑群である。ほぼ完形のもをを対象とした法量については長さ30cm～93cm、大部分が85cm以下である。幅16～48cmである。厚さのデータは8例しかないが9～15cmである⁵¹。

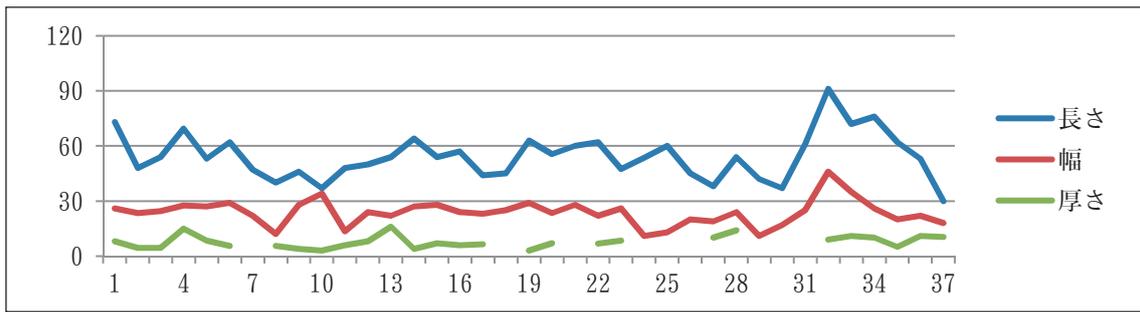
馬の足塚板碑群（登米市東和町）は壇の上板碑群の北東約8km、山道を越えて馬籠に出て、さらに、鱒淵川流域に下り、街道に突き出した細尾根の南端を平場化して築かれた塚である。板碑を塚の周囲に重ねたり、立て並べている特異な板碑群（46基）である。紀年銘のある板碑は5基のみで元徳三年（1331）～延徳二年（1490）年であり、4基は15世紀代である。長さは26～73cm、大部分が65cm以下である。幅は13～50cmであるが30cm未満のものが大部分である。厚さは2～8cmと薄い。

大松寺跡板碑群（一関市藤沢町）は、壇の上板碑群の北西約7km、馬籠から北方の藤沢と西方北上川方面におりる、三方を山で囲まれた要衝の大籠にある。当地は戦国期には本吉郡に属し、大松寺は普化宗の寺院でキリシタン信仰が隆盛となった元和年中（1615－1624）に破却されたとされる⁵²。板碑は山裾の南斜面から出土し、144基を数える。紀年銘のある板碑は7基のみで応永二年（1395）～文明三年（1471）である。ほぼ完形のもをみると板碑の長さは33cm～94cm、大部分は85cm以下である。幅は8～31cm、厚さは2～14cmである。

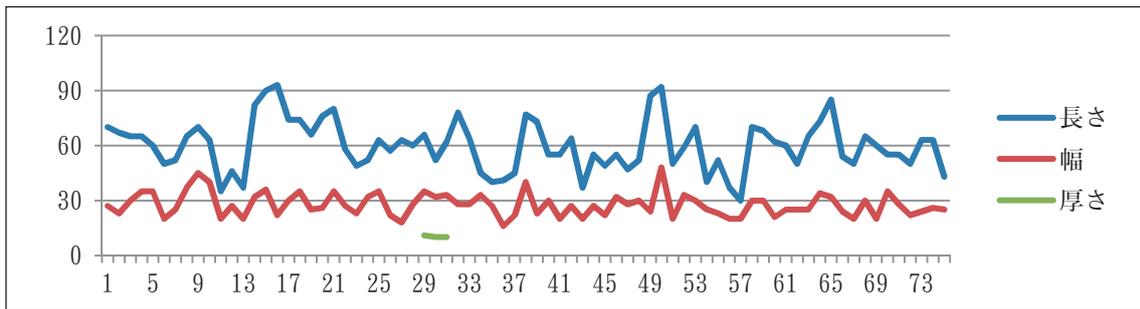
これらの板碑群の板碑の法量は長さ26cm～94cm、幅8～50cm、厚さ2～16cmの中に収まり、壇の上板碑群（ほぼ完形品）の法量、長さ37～91cm、幅は10～46cm、厚さ2～16cmと共通性が高い。なお、大上塚板碑群には長さ125cmで偈「是法平等 無有高下」、長さ99cmで「道元上坐」名板碑がある等、ややランクが上の傾向がある。

(8) 小結

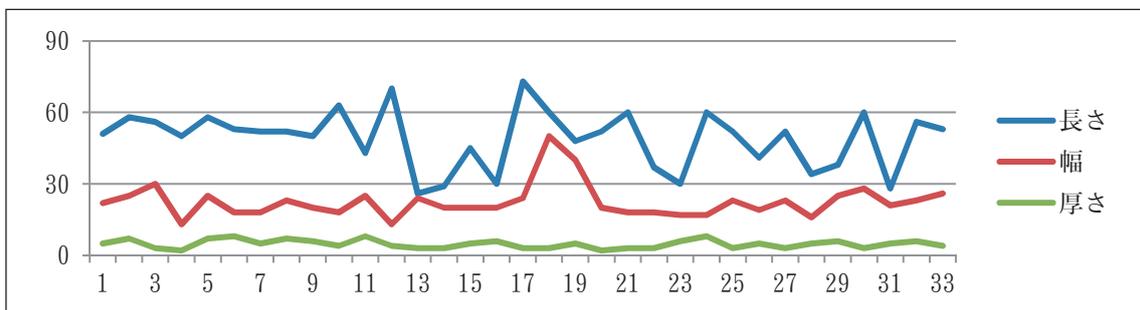
「万法一如」を含む偈を有する板碑は、「万法一如」のフレーズのみ限定した15世紀前葉から後葉の第1期と「万法一如 皆是大日」を主とする16世紀前葉の第2期がある。ただし、今後の調査・発見次第では、「万法一如 皆是大日」銘板碑は15世紀後半に遡る可能性もある。第1期の紀年銘のある板碑は15世紀中葉までは長谷山（中田町）から新井田館跡館下（南三陸町志津川）を結ぶ本吉街道沿いに分布す



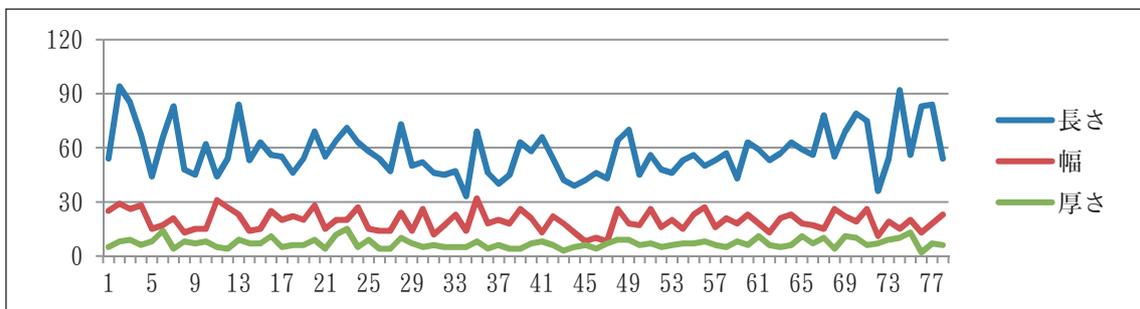
第24図 壇の上板碑群法量



第25図 沢内板碑群法量



第26図 馬ノ足塚板碑群法量



第27図 大松寺板碑群法量

る。ただし、新井田館跡館下では「万法一如」銘板碑（1基）が群（5基）形成の末期とみられる。恐らく海岸部の軍事的緊張状態による館

の強化整備により造立は困難となったものと考えられる⁵³。内陸の入谷、弘川から山道を越えた鱒淵川流域及び二股川流域の丘陵の街道を望

む丘に造立された小型板碑群の中の紀年銘のない「万法一如」偈銘板碑もその出現率の高さ(第22図)、偈の構成、二尊板碑の存在などの共通性から第1期に含まれると考えられる。そして、15世紀前・中葉期に偈「万法一如」は金剛般若波羅蜜経から選び取られた簡潔な偈「是法平等 無有高下」と「応無所住 而生其心」板碑銘の組み合わせとともに小型板碑群を形成する傾向にある。そして、「万法一如」偈板碑は15世紀末葉には道沿いに一関まで北上する。

8 壇の上板碑群の年代

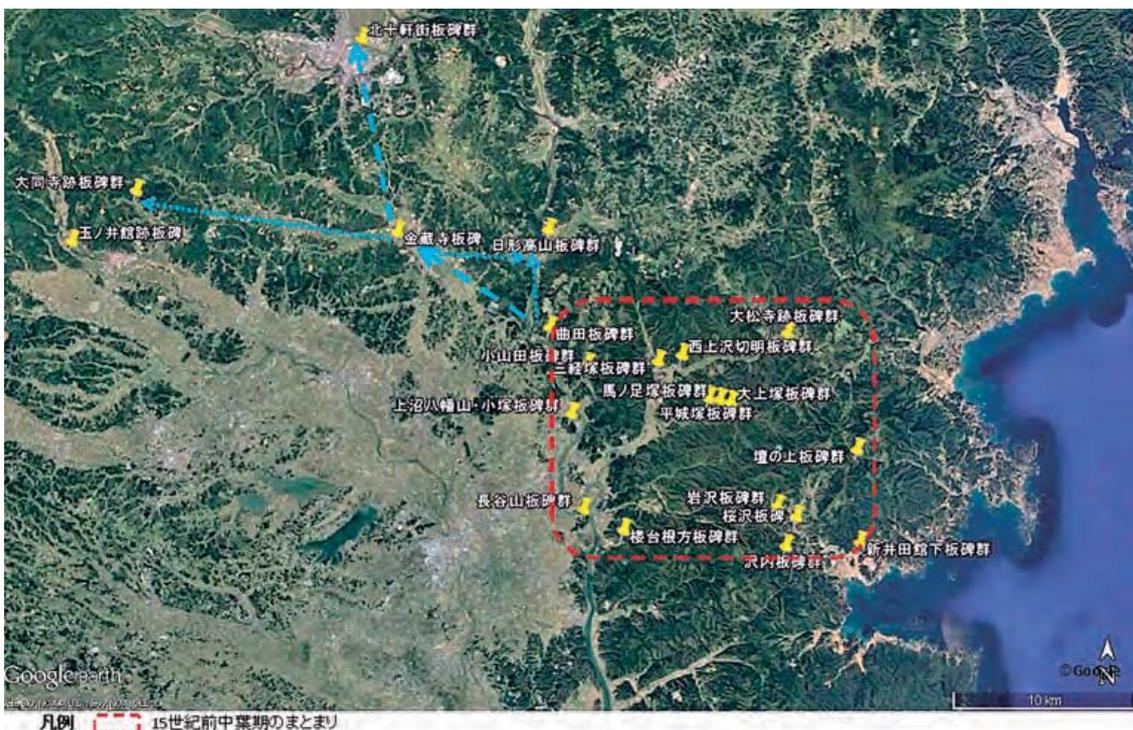
「万法一如」銘板碑を板碑群中に含む南三陸町入谷から鱒淵川・二股川流域丘陵地帯の板碑群は地上高であれば70cm未満の小型板碑で構成されているという特徴を持つ。そのうち、「是法平等 無有高下」・「応無所住 而生其心」(金剛波羅蜜経)を含む少数の偈を中心に大部分が種子のみの板碑で構成される沢内板碑群、馬ノ足塚板碑群、大上塚板碑群、平城塚板碑群、大松寺跡板碑群は14世紀末期から15世紀末期を主体として構成されており、今までの検討から壇

の上板碑群も現状のデータから見る限り、この年代に近いと考えられる。そして他の板碑群と異なり、南北朝期に盛行する偈「十方仏土中 唯一乘法 無二亦無三 除仏方便説」を有する点、比較的近接する沢内板碑群が15世紀中頃で廃絶している点を考慮すれば、壇の上板碑群の年代は14世紀後葉に開始され、15世紀前・中葉を主体として形成された可能性がある。

9 壇の上板碑群とはなにか

(1) 塚であった可能性——馬ノ足塚板碑群との比較

筆者は三陸南部の海岸の入江ごとに連鎖状に分布する板碑群や北上川辺りの丘陵突端に位置する板碑群を相当数見てきた。これらの中では松葉板碑群(女川町)などのように原位置に近いと考えられるものほど集落のある入江や大河を望む丘陵突端の急斜面を棚状に整形し板碑を造立している。しかし、壇の上板碑群は霊山田東山と麓の集落を望む丘陵突端に形成するという一定の共通性を持ちながらも、棚状には整形せず、一つの小平場に集中して造立したかのよ



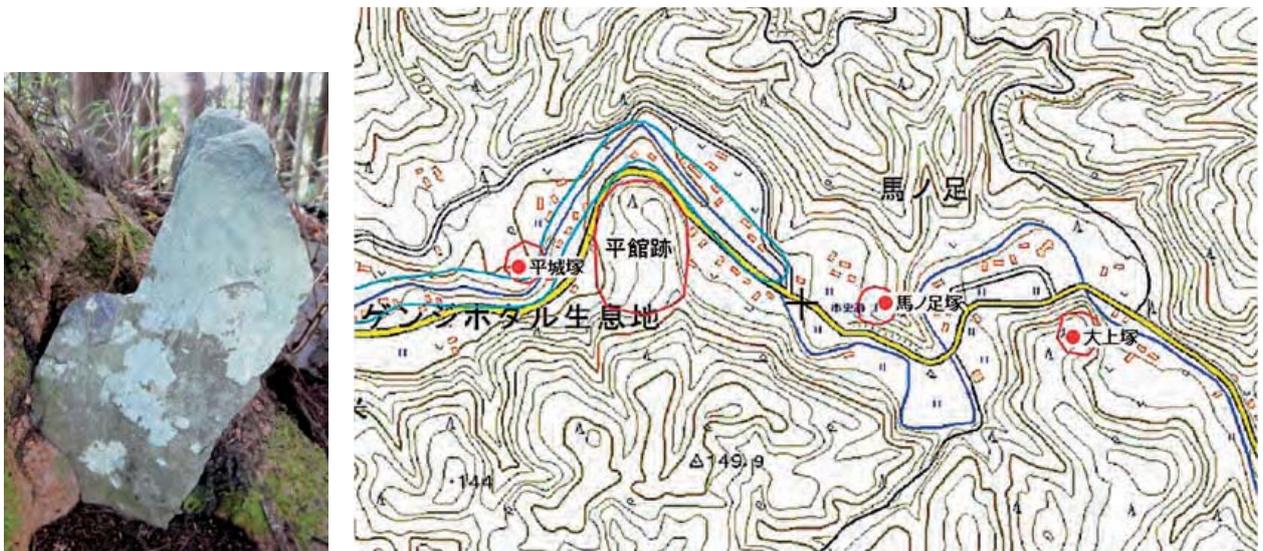
第28図 「万法一如」系偈板碑の分布 ((C)Google)

うに見える。しかも、前述の松葉板碑群のように板碑が点々と立っていたり、並んでいたものが倒壊した状況ではなく、多くが横位で重なり合っている状態である。上方には段もなく左右、下方は急斜面なので原位置に近い。しかし、管理者の話では多くの人が入り込んでいる状況からすれば、原位置に近いながらも山側の西端ライン近くに頭を出すあるいは横倒しの板碑以外は、ほぼ原状を失っている状態かと考えられる。

本来の姿を考えるための事例として北東約8kmにある馬ノ足塚板碑群（東和町 登米市指定史跡）を挙げる。曲折する街道に突き出した細尾根の先端（標高約89m、比高約27m）に平場を設け、塚が築かれている。街道に突き出した丘陵先端部という立地は大上塚、平城塚と共通している。直径3.2m、平面形は円形に近く、高さは約80cmである⁵⁴。塚の周囲に小型板碑が並んでいるがほとんど動かされている。ただし大木に包まれて立っているものもあるのでそのように並んでいた可能性はある。注目すべきことは、7枚以上の板碑状の板石を積み重ねて塚の外周を造っていることである。露出した板碑の表面には種子が確認されるので板碑が少なくとも最上面かに含まれることは確かである。町史ではその板石を積み重ねた周囲に46基の板碑

が並んでいると記しているので実際の板碑数ははるかに多い数となる可能性がある。元徳三年（1331）銘板碑が1点で他の紀年銘板碑は15世紀におさまるので、あるいは「始祖」の塚に結縁する意味で室町期に集中的に再構築された板碑群ではないだろうか。昭和26年に発見され、住民に大切にされ、町指定史跡となった馬ノ足塚板碑群は原状の姿を伝えている可能性があり貴重である。この馬ノ足地区付近の街道を挟む丘陵先端には東から大上塚板碑群（87基）、その西方約0.3kmに馬ノ足塚板碑群、その西方約0.7kmに平城塚板碑群（126基）がある。大きく南方に突き出した丘陵先端部が平館跡であり、その西側に平城塚、東側に馬ノ足塚、大上塚の配置を俯瞰すれば室町期の平山城を中心とした集落の供養の場であり、在地霊場であったのかもしれない。そして「万法一如」銘板碑は大上塚が8基、馬ノ足塚が5基と数が多く、他の偈に対する出現率が最も高い（第22図）板碑群なのであり、壇の上板碑群との類似性が高いと考えられる。

小規模な城館を中心とした東西1kmほどの集落の街道沿いに、併せて300基に及ぼんとする小型板碑⁵⁵を塚という形で造り上げた宗教的エネルギーはどこからくるのであろうか。一つの見方としては国人領主の家中である馬ノ足



（大木に埋もれつつある馬ノ足塚の板碑）

第29図 馬ノ足塚・大上塚・平城塚板碑群、平館跡（「宮城県遺跡地図」を下図として作成）



1 全景(北から)



2 全景(東から)



3 重ねられた塚側面の板碑(西面)



4 重ねられた塚側面の板碑(東面)



5 「万法一如」(反転写真)



6 「万法一如 今日所訪」(反転写真)



7 「万法一如 道光禅門」

第30図 馬ノ足塚板碑群

区という小地域を支配する土豪がその始祖墓周辺を宗教指導者の指導のもとに一族、家来一族の供養の場としたという見方もある。付近の寺院としては西方2.3kmの鱒淵川の下流に大同元年(806 寺伝)坂上田村麻呂創建伝承を伝える華足寺(真言宗)があり、「鱒淵観音」と称された。中興開山が天和三年(1683)とされ

る⁵⁶が、安永三年(1774)『書出』によれば華足寺の地主神走湯大権現が建立され、「天台の山」であったが、永和元年(1375)羽黒派修験伊豆山慈眼寺として中興し、元亀元年(1570)凶族のため焼亡し古記録も焼失したという⁵⁷。走湯権現信仰は12世紀に熊野信仰とともに北上川を遡り平泉を経て比爪に至ったとされ⁵⁸、奥

州藤原氏期の天台宗からその後の羽黒修験の伸長が窺える。華足寺境内の8基の板碑は15世紀前中期で馬ノ足塚板碑群の盛行期と重なる⁵⁹。馬ノ足塚板碑群には「草木国土 悉皆成仏」偈銘板碑（文正二（1467）年）⁶⁰があり、出典が天台密教の大成者とされる安然（841～？）の『樹定草木成仏私記』⁶¹であることを重視すれば、他の偈も併せて考えると天台密教指導者による産物として、「天台の山」伝承とも整合性があり、「天台宗」鱒淵観音との関りも否定できない。

ここでは、壇の上板碑群が馬ノ足地区の三塚のように塚として築かれた可能性を提起しておきたい。馬ノ足塚と同様に南北朝期の「始祖」の塚に結縁した室町期に再構成した塚であった可能性もある。傾斜の強い痩せ尾根の突端に塚を築いたとすれば、「壇の上」の急傾斜地の立地では、封土は豪雨により流れ落ちやすい。むき出しになった板碑の山が、損壊を受ければ現状のような状況になることも考えられるのではないだろうか。一つの想定である。

(2) 造立指導者と造立層

15世紀前・中葉において「万法一如」偈銘板碑を含むそれぞれ100基前後の板碑群は長谷山、鱒淵、大籠、弘川、入谷沢内⁶²の板碑群は北上川の「袋中」⁶³「水越宿」⁶⁴の霊場長谷山から志津川湾方面への山越えの道の要衝に形成された在地霊場であるのではないか。田東山においても確認された数は少ないがその性格上、同様の板碑群の存在も想定しうる。それらには「是法平等 無有高下」という南北朝期以来、登米・本吉・栗原・桃生・石巻湾と広域で盛行した偈と板碑分布圏全域に共通するメニューである「応無所住 而生其心」という『金剛波羅蜜経』から選ばれた偈に加えて、さらに簡潔な「万法一如」を選び出し需要層拡大を図った宗教勢力の工夫が窺える。共伴する板碑の偈の出典を併せ考えれば、造立指導者の蓋然性の高いのは、天台密教勢力と考える。当初の予想の曹洞宗正法寺派とは異なるがその進出は動きの背景としては関連するであろう。

14世紀後葉から15世紀中葉の年代の年代と考えた壇の上板碑群の様相からは近隣の小型板碑群と同様、簡素な板碑製作技術体系を保持しつつ、恐らく土豪層とその配下の人々を対象とした布教の一環として簡便な十三仏造塔供養システムに変容したことが窺える。

造立と供養儀礼を主導した天台勢力とはだれであろうか、15世紀前半期において壇の上に最も近い天台宗寺院は樋の口の応永十六年（1409）創建とされる津龍院である。ただし板碑が周辺で確認されていないので壇の上板碑群の造立主体とするには無理がある。本板碑群と類似する馬ノ足塚のある鱒淵川流域には、華足寺が存在し、小板碑群もあるが当時の「鱒淵観音」とその「板碑塚」（塚と板碑群のセット形態）とは直ちには結びつかない。仮に壇の上板碑群が津龍院、馬ノ足塚板碑群が華足寺の指導によるとしても両板碑群の近似性は、板碑造立供養の組織的体系を持つ天台密教勢力でなければ困難であり、それは周辺の板碑群の規模、実績により裏付けられなければならない。前述したように「万法一如」銘板碑を初期に造立した長谷山（中田町）の遮那山長谷寺（天台宗）は、葛西氏の外護を受け「四十八坊を擁した一山寺院」であったとされ⁶⁵、長谷山には弘安六年（1283）から文亀三年（1503）年に至る中田町最多の71基、浅水地区では約100基の板碑群が確認されている⁶⁶。状況証拠であるが「万法一如」偈の板碑への採用も長谷寺の天台密教勢力の可能性を考えておきたい。また、北上川沿いには坂上田村麻呂創建伝承と連動する長谷寺の観音信仰がある。鱒淵の華足寺もまた坂上田村麻呂創建の奥州七観音の一つ鱒淵観音という伝承があり、「馬の足」という地名も坂上田村麻呂の愛馬の足跡に因むという。そうすると長谷寺を主体として、田村麻呂伝承で結ばれる華足寺、田東山寺院群、津龍院、入谷の沢内寺に至る山の要衝を結ぶ天台宗寺院のネットワークも一仮説として想定したい。発信が長谷寺であったとしても、実際の造塔施工は各地区の寺庵が担当したとすれば、各板碑群の「万法一如」の書体がさまざまであるのは、このことと関連す

るかもしれない。

このネットワークは奥州藤原氏期以来の金産地の大籠・馬籠方面、さらには小泉湾方面⁶⁷から北上川水運の要衝への幹線道の伝統を再編成している可能性もある。なお、長谷寺の北西約4 kmの北上川辺にある上沼寺山の弥勒寺(真言宗)は「白鳳五年」、役行者創建、弘法大師伝承があり、藤原氏、大崎氏、葛西氏の外護を受けた「二十四坊」を伝える有力寺院⁶⁸である。周辺には南北朝期を主体に一大板碑群が形成されている。「古くは天台宗の一山寺院」と⁶⁹すれば長谷山とともに「袋中」の天台宗の聖地・霊場を形成していたと考えられ、当時の一帯の宗教的求心力と布教力が大きかったことを想定できるのではないだろうか。

また、壇の上板碑群の「壇」名称が、その由来に関係して密教修法に際して仏像を安置し供物を置く土壇などを意味するとすれば馬ノ足塚のような「塚」⁷⁰の性格に通じている可能性があり、その場合は修験との関りも想定される。長谷山の長谷寺は弘治三年(1557)年、隆源法印智満が天台宗から修験に改宗して中興の祖とされているが⁷¹、15世紀前半の状況は不明である。また、弘川地区には、馬ノ足地区のような土豪勢力を想定する城館跡を見いだせていないが、樋の口の出雲館跡のような田東山信仰に関わるとみられる屋敷が近辺に存在した可能性もある。中世の田東山には天台宗、田東山寂光寺、羽黒山清水寺、幌(母衣)羽山金峯寺という羽黒・金峰修験が田東山修験と棲み分けしたことを彷彿とさせる伝承があり、葛西氏は千葉氏を支配に当たらせ庇護したとされている⁷²。「寂光寺跡」から壇の上板碑群の板碑に近似する小型の板碑が出土⁷³していることは、15世紀ごろの周辺地域の板碑造塔供養に田東山の宗教勢力の一定の関与も想定される。弘川が田東山の西登拝口であり、地名もそこでの禊に由来し、登拝口の千本桂が樹齢550年とされるなどのデータは、明確な時期は不明であるが、中世後期の田東山信仰の隆盛、あるいは修験活動を想起させる。大慈寺や津龍院のように西光寺も天台宗からの改宗の可能性もないだろうか⁷⁴。

このような状況を踏まえれば、壇の上板碑群の造立指導者は、あるいは、田東山西麓の宗教儀礼を管轄する修験勢力と関わる可能性も想定しておきたい。総じて一仮説を述べるならば、15世紀前半頃、長谷寺を主体とする天台宗ネットワークの中で田東山の西麓(弘川から鱒淵川上流域付近)では土豪層とその家来に連なる人々(職能民など)を主対象とした造塔供養に田東山の修験勢力の関与があったのではないだろうか。また、大上塚板碑群の応永十年(1403)銘板碑にみえる「善阿弥」銘(実見)が、被供養者であったにせよ、造立層の具体である職能者、技術者である可能性に注目しておきたい。そして大上塚に「上坐」銘板碑があることは、仏門に入った人々の中で上級の階層まで進んだ人が存在している可能性を示しているのではないだろうか。

いずれにせよ、永享元年(1429)の狼河原(米川)の大慈寺創建、弘川の西光寺創建は、一時的にせよ人々が集住する求心力がある一帯であったことを示しており、壇の上板碑群が天台宗勢力の造営指導によるとしても密教的要素を取り込んだ曹洞宗峨山派の水沢正法寺が当地にも進出するなど禅宗の進出にも影響された可能性もある⁷⁵。

10 おわりに——課題

本稿では、壇の上板碑群の現状の概要とその意味するところの予察を行ったが十分な整理と考察に至らず今後の課題としたい。造営に関わる可能性を指摘した遮那山長谷寺とは直接の関係を見出していない弘川だが、「壇の上」のある山の「天神の森」の「天神」は長谷山の守護神でもある天神社が存在したことと関わるのかも知れない⁷⁶。14世紀後半から15世紀前半の三陸南部は、続々と衰退した天台宗寺院が曹洞宗に改宗されてくるだけに慎重な検討が必要となる⁷⁷。

壇の上板碑群については、今後、遺跡登録がなされ、平面図作成の上で板碑の表裏確認と表土をはぐ程度の確認調査を実施すれば、種子、

銘文を持つ板碑がさらに発見され、原位置に近い部分が明瞭になり、近隣板碑群との正確な対比が可能となることが期待される。

筆者の南三陸におけるフィールドワークは五年目を迎えるが、360基を越えることが推測される南三陸町域の板碑文化の豊かさと海辺から山への広がりには驚くとともに、鎌倉・南北朝期においては追波川河口、長面浦、ひいては石巻湾文化の波を感じさせ⁷⁸、室町期に入ると葛西氏本拠地登米の東部地域との交流を感じさせる時代の変遷も見えてきつつある。

本稿で取り上げた板碑群が15世紀後葉に衰退し途絶に向かうのは、応仁二年（1468）、大崎氏家臣の反乱に始まる登米・本吉・栗原・胆沢一帯を巻き込む文明の乱という当地域の戦国期の開始、さらには長享二年（1488）に始まる大崎氏家中の反乱⁷⁹などの戦乱の中で、長谷山は長谷館として軍事拠点となり⁸⁰、中で造塔供養思想及び実施システムも崩壊したのではなかろうか。しかも南三陸町域の板碑群が最も早く15世紀中頃に一齐に消滅するのは軍事的緊張状態による造塔システムの縮小か、禅宗の進出との関連が課題となる。

本稿の契機となった弘川に関する「土金掘り」が15世紀前半期に重なれば、当地の一時的な集住と求心力の証明になりうることからこれも課題である。現在までに知られている産金地としては貞任山（標高360m）の西南の金山沢はじめ貞任山周辺の大上坊、米広、樋の口の金山沢、上沢の「あかがね洞」などがある⁸¹。これらは確認調査をすれば中世後期から江戸初期の山間地帯集住と板碑文化の隆盛と消滅の謎が解けるかもしれない。その上で玉山産金遺跡（岩手県陸前高田市）のように史跡として整備すれば東日本大震災からの復興交流の一助になることが期待される。戦国期に金の産出で著名な大籠⁸²にあるキリシタン資料館には大松寺跡出土の種子と銘文に金箔を施した板碑と種子を刻まず金書した板碑⁸³が展示されており、板碑「本来の姿」に感銘を受けた。あるいは、本稿に登場する小型板碑群も同様に金色に輝いていたのかもしれない⁸⁴。これらに使用する金はお

そらく一帯の採掘・運輸のネットワークに支えられていたのではないだろうか。それらを担う人々が「金山衆」として山間の各地にあって節点を結び⁸⁵、かつ宗教勢力も布教対象の底辺拡大を板碑による造塔供養の最終段階として展開したのではないだろうか。今後の課題である。

最後にいつも温かく援助していただいた壇の上板碑群の管理者の山内重義区長ご夫妻に厚い感謝を申し上げます。また、ご協力をいただいた鈴木卓也氏、七海雅人氏、永広昌之氏、永見秀徳氏、畠山篤夫氏、室野秀文氏、鈴木弘太氏、野口達郎氏、羽柴直人氏、井上雅孝氏、山内明美氏、伊東昌人氏、源敏一氏、佐藤信行氏、小野寺寛氏、三浦彩子氏、大久保良峻氏及び南三陸町教育委員会、登米市教育委員会とご案内いただいた多数の地元の皆様に感謝する。

（本稿は、科学研究費補助金基盤研究（B）「東北太平洋沿岸地域の歴史学・考古学的総合研究」（研究代表者・七海雅人）による成果の一部である。）

注

- 1 田中則和「南三陸町における板碑・城館跡の概要」・「南三陸町朝日館跡と板碑・城館跡分布から新井田館跡」『宮城考古学』第19号（2017）宮城県考古学会
- 2 『歌津町史』（1986）歌津町
- 3 未登録遺跡であるが、調査の経緯、成果については町教育委員会に随時報告している。
- 4 「宮城県遺跡地図」（宮城県教育庁文化財保護課）は国土地理院ウェブサイトを出典とするものである。
- 5 『歌津町史』（1986）歌津町 小泉村にも「弘川」があり、複数の登拝口の存在を示している。「小泉村」『宮城県の地名』（1987）平凡社
- 6 『歌津町の古碑』（2004）歌津町教育委員会
- 7 小野寺寅雄『みやぎの峠』（1999）河北新報社
- 8 『歌津町史』（1986）歌津町
- 9 曹洞宗宮城県宗務所十四教区HP
- 10 「全国巨樹探訪記」HP 『宮城の巨樹・古木』（1999）河北新報社
- 11 時枝務「山岳寺院の伽藍構成」『田東山一遺跡群

- 発掘調査報告書』(1998) 歌津町教育委員会
- 12 『歌津町史』(1986) 歌津町
- 13 「出雲館」『史料 仙台領内古城館 第二巻』(1973) 宝文堂
- 14 『宮城県寺院大総覧』(1975) に全照満庵和尚の開基、天文五年(1536) 乾廸和尚、馬籠四郎兵衛を開基として館浜に創立とある。『歌津町史』(1986 歌津町) では樋の口の山内出雲館との関連を推定。
- 15 標柱には田東山からの帰り、信者が川の水で身を清めようと川のふちに桂の木の杖を突きさし置き忘れたものが成長したという言い伝えが記されている。
- 16 宮城県文化財調査報告書第140集「田東山寂光寺跡」(1991) 宮城県 板碑の実見にあたっては所蔵する東北歴史博物館、相原淳一氏のご配慮をいただいた。
- 17 歌津町教育委員会『田東山遺跡群発掘調査報告書』(1998) 歌津町
- 18 三崎一夫『弘川民俗小記』(1999 私家版)
- 19 『歌津町史』(1986) 歌津町
- 20 区長の山内重義氏のご教示による。
- 21 作成に際し、九州文化財計測集団(CMAQ) 代表の永見秀徳氏より懇切な指導を受けたことを感謝する。作成にはソフトの能力に個人パソコンのスペックが釣り合わず50日を要した。
- 22 十分な観察ができなかったため、「板碑状石製品」としたものには加工痕跡が不明確なものを含む。
- 23 頼富本宏「十三仏の図像と功德」『十三仏の世界』(2012) ノンブル社
- 24 中田町『中田町の板碑』(2004)
- 25 『東和町のいしぶみ』(2005) 東和町教育委員会
- 26 石田瑞麿『例文仏教語大辞典』(1997) 小学館
- 27 廣瀬良弘「禅宗の日本への伝播とその日本的展開」駒沢大学廣瀬良弘研究室HP
- 28 壇の上板碑群の板碑状石製品については一定の形や大きさが選択され、頭部整形も認められるものがあることや一関市藤沢町大松寺跡などでは、刻字を伴わない金書板碑が出土していること(実見、大矢邦宜・井上雅孝「金書板碑と墨書板碑」『岩手県立博物館研究報告 12号』(1994) 岩手県立博物館)、また墨書板碑の存在(柳内壽彦「墨書板碑ノート」『六軒丁中世史研究 8—大石直正先生古希記念』2001 東北学院大学中世史研究会)からほとんどが板碑として使用された可能性が高いと考えた。
- 29 石材については永広昌之氏の現地指導と評価に
よるところが大きい。深謝するとともに、文章化にあたっては小生の理解不足がありうるので文責はもとより筆者にある。
- 30 末木文美士『日本仏教入門』(2014) 株式会社 KADOKAWA
- 31 橋爪大三郎・植木雅俊『ほんとうの法華経』(2015) 筑摩書房株式会社
- 32 加藤政久『石仏偈頌辞典』(1990) 国書刊行会
川勝政太郎『偈頌』(1984) 言叢社
- 33 石造美術の偈頌HP 勝倉元吉郎ほか『北上川流域のいしぶみ』(1994) 宮城県桃生郡河北地区教育委員会『石巻の歴史 第八巻』(1992) 石巻市
- 34 「弥惣峠」『宮城県の地名』(1987) 平凡社
- 35 「長谷寺」『宮城県の地名』(1987) 平凡社
- 36 『東和町のいしぶみ』(2005) 東和町教育委員会
- 37 曲田板碑群は14世紀中頃から15世紀中頃で推定140基
『藤沢町の板碑』(2002) 藤沢町教育委員会
- 38 栗駒地区の「万法一如」銘板碑に言及することができず、課題としたい。栗駒地区は戦国期には富沢氏が領有している。
- 39 『藤沢町の板碑』(2002) 藤沢町教育委員会
- 40 「即身成仏義」『空海コレクション2』(2004) 筑摩書房
- 41 土倉宏「台密における円密一致思想・「伝法聖者闕略」について—安然・仁空の思想を中心に」(2005) 印度學佛教學研究 第五十四巻 第一号
- 42 『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』
- 43 『デジタル版 日本人名大辞典+Plus』ほか
- 44 加藤政久『石仏偈頌辞典』(1990) 国書刊行会
- 45 石巻市『石巻の歴史8』(1992)
- 46 中田町『中田町の板碑』(2004)
- 47 川勝政太郎『偈頌』(1984) 言叢社
- 48 ここでは概ね群中に地上高が70cmを越えるものがない(全長1m未満)板碑群をイメージしている。
- 49 田中則和「妙樹禅尼の逆修「石塔」造立—南北朝期南三陸の時空(序論)」『六軒丁中世史研究 第17号』投稿中
- 50 服部清道『板碑概説』(1972) 角川書店
- 51 志津川町『歴史の標』(1991)
- 52 「大籠村」『岩手県の地名』(1990) 平凡社
- 53 このことはこれらの内陸交通・運輸における新井田館の重要性をも示している。田中則和「南三陸町における板碑・城館跡の概要」・「南三陸町朝日館跡と板碑・城館跡分布から新井田館跡」『宮城考古学』第19号(2017) 宮城県考古学会

- 54 法量は佐藤信行ほか「宮城県北部における大型板碑と小型板碑について」『宮城考古学 第5号』（2003 宮城県考古学会）による。概要は東和町郷土史研究会『東和町史』（1987）東和町教育委員会
- 55 この時期の小型板碑の多さは、十三仏信仰における「一碑一尊」遵守によるという千葉和弘説を基本的には前提とするが、本地域での回忌の比重は五七日、百々日、一・三・七・十三回忌におく傾向がある。千葉和弘「岩手県南における中世板碑の一側面」『紀要XVIII』（1998）（岩手県埋蔵文化財センター）
- 56 『安永三年 書出』東和町史編纂委員会『東和町史』（1987）東和町 華足寺地主神の走湯大権現の書出の「天台の山」との伝承との整合性が失われているが天台宗から真言宗への改宗が覗かれる。田村麻呂と観音伝承は、野崎準「坂上田村麻呂と観音伝説—「みやことみちのく」の落穂—」『東北文化研究所紀要 号46』（2014 東北学院大学東北文化研究所）参照のこと。
- 57 『安永三年 書出』『登米郡米川村史』（1955）米川村 永和元年に羽黒修験が入ったかは明確ではない。
- 58 菅野文夫「樋爪俊衡と高水寺の走湯権現—平泉までの道・平泉からの道—」『岩手大学平泉文化研究センター年報』（2017）岩手大学平泉文化研究センター
- 59 華足寺境内の説明板には鱒淵川に面して「経塚」が記されており、東方2.3kmの道沿い突端の「平城塚・馬ノ足塚・大上塚」との関連、経塚の可能性が目ざされる。
- 60 『東和町のいしふみ』（2005）東和町教育委員会
- 61 末木文美士『草木成仏の思想』（2015）株式会社サンガ
- 62 入谷沢内から馬ノ足塚まで直線距離で8.8km 弥惣峠越えの道はそれに近い。志津川の人々は馬頭観音こと華足寺の参拝には弥惣峠の道を通ったという（小野寺寅雄『みやぎの峠』1999 河北新報社）。
- 63 『中田町史 改訂版』（2005中田町）では中世に水越村付近は「袋中」と呼ばれたと伊達政宗書状などから推定している。
- 64 「水越村」『宮城県の地名』（1987平凡社）では暦応二年（1339）板崎為重軍忠状に「水越宿」とある。
- 65 「長谷寺」『宮城県の地名』（1987）平凡社
- 66 佐沼高等学校歴史研究部「中田町における板碑調査」『平瓶11』（1975）
- 67 伝承では、小泉村には藤原秀衡の従姉妹の乙和が建立した天台宗養光寺（現在の臨済宗浄勝寺）があり、乙和は馬籠、山田、津谷を領したという。「小泉村」『宮城県の地名』（1987）平凡社
- 68 「信仰」『中田町史 改訂版』（2005）中田町
- 69 「弥勒寺」『宮城県の地名』（1987平凡社）
- 70 経塚に結縁して板碑造塔を図った可能性もあるが、12世紀の田東山の経塚群と異なり単独であり様相は異なる。ただし、12世紀の北上川の経塚は交通大動脈を守る機能が推定されており留意が必要である（八重樫忠郎「東北の経塚」『平泉文化研究年報2』2002 岩手県教育委員会）。奥州市前沢区古城所在の寺ノ上経塚のように街道を望む位置への経塚占拠は12世紀に行われている。
- 71 「信仰」『中田町史 改訂版』（2005）中田町
- 72 佐久間洞巖『奥羽観蹟聞老志 卷九』（1719）田辺希文『封内風土記』（1772）「田東山」『宮城県の地名』（1987）平凡社
- 73 宮城県文化財調査報告書第140集「田東山寂光寺跡」（1991）宮城県
- 74 西光寺ご住職のお話しでは田東山の宿坊であった可能性もあるという。賛成である。
- 75 『入谷安部物語』『入谷村古今集』をもとに入谷郷土史研究会が編集した『入谷物語』（1980 入谷地区公民館）には、紀州那智山の山谷脚が越後高雲寺にて仏門に入り道入と称してこの地に来て、応永二年（1395）普門院（曹洞宗）を創建し、蔵王権現の守護があったという興味深い伝承が紹介されている（ ）。佐々久『宮城県仏教史』（1977）によれば新潟県村上市に応永元年（1394）、傑堂能勝により創建された耕雲寺（曹洞宗）は応永年間に五世瑚海仲珊が名取郡東安寺を開くなど法系が多数あるので可能性がある。
- 76 横田隆志「『長谷寺験記』から見えるもの：与喜天神縁起を中心に」（2005）『日本文学 54（4）』
- 77 田中則和「妙樹禪尼の逆修「石塔」造立—南北朝期南三陸の時空（序論）」『六軒丁中世史研究 第17号』投稿中
- 78 田中則和「妙樹禪尼の逆修「石塔」造立—南北朝期南三陸の時空（序論）」『六軒丁中世史研究 第17号』
- 79 「国人領主の活動」『石巻の歴史 第一巻 通史編（上）』（1996）石巻市
- 80 弥勒寺近辺にも弥勒寺館が存在する。「中世袋中の世界」『中田町史 改訂版』（2005）中田町
- 81 小野寺寛「歌津地区の産金遺跡」鈴木卓也「入

- 谷地区の産金遺跡』『南三陸ふるさと研究誌 第1号』(2008)南三陸ふるさと研究会(代表 佐藤正助)
- 82 天正17年(1585)、砂金250目受け取りを伝える葛西晴信書状等。「大籠村」『岩手県の地名』(1990)平凡社
- 83 大矢邦宜・井上雅孝「金書板碑と墨書板碑—岩手県藤沢町出土の金書板碑報告を中心に」『岩手県立博物館研究報告 第12号』(1994)岩手県立博物館
- 84 馬ノ足塚板碑群応永25年(1419)碑(長さ56cm)には金箔が確認されている。『東和町のいしぶみ』(2005)東和町教育委員会
- 85 長谷山のある水越、米川の稲村、米谷にも「金山」があったことが(岡陽一郎「奥州金山史序説」『日本の金銀山遺跡』2013 高志書院)に記されているが、時代不明である。本稿の時期と重なれば長谷山周辺から大籠、弘川の動態に連動するかもしれない。

補注

脱稿後、田東山にあった板碑として西光寺小澤良孝氏、小野寺寛氏よりの教示で宮城県調査D地点の西南方約180m地点で出土し、西光寺(歌津)に納められた小型板碑1基(種子キリーク 高さ39cm 幅24cm 厚さ14cm 金箔?)を確認した。この付近に板碑群が存在している可能性がある。



(オルソフォトソリッド)